

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月十回）
昭和十五年六月廿日印刷刷本
昭和十五年七月一日發行

第六卷 第七號

淨土



七
月
號

陸海軍
病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に五千二百余回の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆ 一口一圓三十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆ 御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一旦一球で健康量

品製研理



合理的な新製品

肝油を精製した 肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のグロビュールに收めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

新製合理的ビタミン球は、最近のビタミン學說に據り、一旦二球づゝ服めば完全に生理的健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千D一千國際單位を含有させた製品。しかも形はどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

總代理店
株式会社
玉置商店
振替東京七二番

品切の際は總代理店へ

理研 ビタミンAとD 球



浄土七月號目次

表紙

法隆寺藏天人像(飛鳥時代彩色木彫)

扉・目次カット

鈴木金平

微笑と沈黙

佐藤賢順(六)

初夏靜念

吉田絃三郎

(六)

信仰
實話

囚人の純情

石橋徳作(五)

私の健康法

井上哲次郎(四)

記念
論說

正しい國旗の知識

小橋麟瑞(七)

童話

めだか

濱野義光(四)

前線
實話

部隊慰靈祭

衣笠秀三(二)



信

仰

相

談

中村 辨康 (吾)

七月の佛教行事

(哭)

地獄に墜ちた紫式部

高瀬 承嚴 (言)

聖跡巡禮 阿沙茶月の光り

野生司 香雪 (三)

阿彌陀さま

佐藤 春夫

(八)

歌壇

與謝野 晶子選 (三)

俳壇

太田 耳動子選 (三)

「浄土宗讀本」を讀む

野須 喧雄 (西)

さまよふ私達の現實

中村 辨康 (英)

會

員

通

信

(四)

編輯後記

(西)

浄土七月號目次

林隆碩師著

選擇本願念佛集講話

△跋——藤堂祐範師「書誌學上より見たる選擇集」

四六版約二百頁本文九ボ
表紙勅傳「選擇御製作の圖」の
模

寫眞版京都廬山寺藏(國寶)
選擇集稿本

定價金七十錢(送料金六錢)

◇…林隆碩師曰く「元祖大師は既に七百三十年の昔、極樂へ還へらせたまひ、その後尊容に接すべくもありません。され、こゝに選擇本願念佛集の存するありて、祖師の法身に面し得るは、眞に長夜を照らすの靈光であります。」と

◇…實にや選擇集一卷は淨土宗の魂であり、生命であります。この集の存するところによつて七百年前の祖師に見參し奉り、吉水の流れが清く濁らず、何時／＼までも流々傳々するのであります。

◇…本書は林隆碩師によつて、昭和十四年一月號から同十五年三月號までの華頂誌に連載された「選擇集講話」を基礎として新に増補訂正を願ひ、更に跋として藤堂祐範師にお願ひし、師多年の御研究になる「書誌學上より見たる選擇集」を附しました。行文極めて平易、在家向としても好適であります。

京都市東山區林下町知恩院内

發行所

華頂文社

振替大阪二五六一二番(知恩院)

淨 土
七 月 號

會者定離は常のならひ今はじめたるにあらず、
何ぞ深く歎かんや。宿縁空しからずば同一蓮に
坐せん。淨土の再會甚だ近きにあり。今の別れ
は暫しの悲しみ、春の夜の夢のごとし。

法然上人御法語



微笑と沈黙

—— 續「東洋の微笑」——

佐藤賢順

宗教上の最奥の境地は、離言絶慮と言はれてゐる通り、人間的な言葉や世俗的な思想を以てしては表現することができない。尤も一應は、言葉や思想で表現してみることが必要であるが、それはたゞ言葉や思想ではその境涯を表すことができないといふことを知るための、消極的な意味をしか持つてゐない。

何故であるか。それは言葉といふものゝ持つてゐる働きを想像してみればわかる。言葉による表現は、「これはあゝである」「これはかうである」と、或る事柄を明確にさせる効果があつて、大變に好都合であるけれども、明確にするのには、その事柄の或る點だけを特に取り出して言はなければならぬ。例へば「あの人は好人物だ」と言へば、その性質の外に、短所——決斷が鈍いといふやうな點を見失ひ勝ちで、その人の正しい評價でも表現でもないことになる。これを明確にすることは直截

に或る事の特徴を表現する便利を持つてゐるが、同時に、限定するといふ不便を持つてゐて、下手にゆくと、その爲に極大内容の豊かな奥深いものを、空虚な薄つべらなものとして表はすといふ結果を免れないからである。

であるから、いよいよ複雑な事態や高度の感激や雄大な風景に遭遇すると、あらゆる努力にも拘らず、人間の言葉は役に立たなくなつて「名狀しがたい」とか「なんとも言ひやうのない」とか「筆舌に盡し難い」とかいふ言葉が用ひられるので、實はこれは言葉の役目をしてゐない言葉である。言葉であるとしても、それは肯定的ではなく否定的な表現法である。

否定的な表現は全く單なる否定に終ることもあるけれども、逆に、非常に大きい深いものを表現する場合もある。これはあなたのものではないと言へば、同時に「これは誰か他の人のもの



のである」といふ意味にならう。それには、他の如何なる人のものであつてもよいといふ廣汎なる可能性が残されてゐる。「空氣はあなたのものではない」と言へば、それは誰のものでもある、といふ肯定的な意味が残されるであらう。「デパートでは賣つてゐないものはない」といふ二重否定が、何でも賣つてゐるといふ可能性を残すのと同様である。否定的な言葉は幾度も幾度も繰返されれば、いよいよ物の眞の姿に迫つてゆく。

然し積極的な内容を表すといふわけにはいかない。そこで言葉に代はる他のものが表現の手段となつてくる。「不立文字」を立前として直指人心を目指す宗派でも、言葉に代はる他の手段による表現までも拒げるわけではない。

何が言葉に代はるであらうか。身振り、手振り、足振り、言葉としては意味を持たぬ聲、音、色などがそれで、山色溪聲も意味の表現となり、憤怒の行相も微笑の溫容も、全く意味を表はさぬとされる沈黙さへも、表現の手段とされうるのである。宗教に於いては、否定的な言葉と同じやうに、これらの手段が積極的な内容や意味の表現として用ひられることのあるのは、珍しいことではない。

世尊は昔、靈鷲山上の會座にあつた時、一輪の花を拈して衆に示した。それが何のことか解らなかつたので、多くの弟子達

はぼかんとしてゐて誰一人答へるものがなかつた。たゞ迦葉尊者だけがつこりと微笑んだ。そこで世尊は「吾に正法眼藏涅槃妙心、實相無相微妙の法門あり。不立文字、徧外別傳、迦葉に付屬す。」と言はれたといふ話は餘りにも有名な話。問は拈花によつてなされ、答は微笑によつてなされた。この拈花も微笑も凡俗の言葉や概念では到底示し得ないものを示し、受取り得ないものを受取つてゐる。それは狭く限られた不自由な言葉の限界を越えて、限りなく高く深いものを象徴してゐる。宗教に於いてはこれらが眞の言葉で、言葉以上の言葉とでもいふべきか、説明したり描寫したりするのではなく、直接に物の核心を象徴するのである。

私はこの春、大和の寺々を歩いて、數々の佛の微笑に接することが出来た。推古、天平の微笑、貞觀、應永の微笑など、それぞれにその時代の精神的な濃さ深さを物語つてゐる。心高ぶり整める者には、靜かなる素直さを教へ、憂ひに沈み氣宇闊けざる者には、なごやかなる喜びを興へる。微笑は佛の語る言葉である。

身口意の三密といふことがある。三密とは三つの秘密をいふのではなく、この三つは佛の正覺の境涯であるといふ意味である。人間の動作や言葉は凡て自己本位の恣意に基いて爲されるから、善惡の業果を感ずるものであるが、佛のそれは全くこれ



とは違ふ。身密とは主に手指屈伸の印相を言ふのであるが廣い意味にとれば、微笑もまた身密であらねばならぬ。

序ながら沈黙についても一言述べて置かう。沈黙が微笑と同じく最高の宗教的言語の一つであることについては「維摩詰所説經」の語るところを聴くがよい。

維摩居士は會中の多くの菩薩達に尋ねる、

「人々よ、どうしたら不二の法門に入ることができるであらうか。」

不二の法門とは、言ふまでもなく、相對を離れた最高、絶對の證の境涯である。そこで、菩薩達は次ぎ／＼に銘々の思ふところを述べる。まづ法自在菩薩と呼ばれる菩薩が、

「人々よ、生ずること滅することとは、二つの相對する考へ方である。であるから、この相對する考へ方をやめて、法は本來生じたものではない。従つて滅することもないと悟つたならば、變化し生滅することのない境地を得て、不二の法門に入ることができる。」

と答へたのを初めとして、以下三十人の菩薩達が及ぶ限りの思慮を傾け、精緻な概念的分析和相手を説得しなければ止まぬ雄辯とて、不二の法門の如何なるものであるかを論ずる。或る者は、善と不善との相對を越えるところに不二の法門があると

言ひ、或る者は、我と無我との對立を越えたところに眞の無我があると述べ、また或る者は、生死と涅槃との對立の彼方に眞の涅槃があると論ずる。其の論ずるところは、同巧異曲であつて、いづれも證の妙境を衝き、而も深遠高遠なる哲理を開陳する。

それは恰も座談會か圓談會かに出席して喧々囂々の議論を傍聴してゐるかの感がある。

かうして一通り並居る人々の答を求めたあとで、最後に維摩は文珠師利に問ふた、

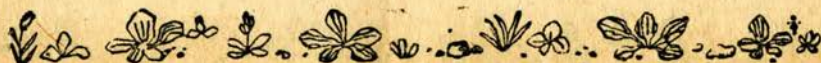
「不二の法門とは何か」

と。昔から「文珠の智慧」などと理論家の代表者のやうに言はれてゐる彼は答へた、

「私の考へるところではかうである。一切の法に於いて、言も無く、説もなく、示もなく、識も無し、諸の問答を離る。これが不二の法門に入るといふのだ。」

この答は恐らくは最も正鵠を得たものであつたであらう。文珠石に文珠は答ふべき所を答へ、衝くべき所を衝いてゐる。文珠はかう答へて、維摩に迫つた。

「われ／＼はめい／＼自らの思ふところを説いた。さあ、今度は居士の答へる番である。如何にして不二の法門に入ることができるか。」



——時に維摩詰、默然として言無し——とお經には書いてある。

文珠師利はこの沈黙の意味を直ちに把らへて、

「善い哉、善い哉、……文字語言あることなし。これ眞に不二法門に入るなり。」

と感歎した。

これに似た説話は『證佛要集經』にも數ヶ所書かれてゐる。

或る會座で世尊は文珠に次のやうに尋ねられた、

「文珠よ、どの眼、どの行で佛を見ようとするのか。どの耳で佛の教を聴かうとするのか。」

文珠は默然として答へなかつた。その會座に集つてゐた人々は、

「世尊のお尋ねが餘りに難しいので、文珠は答へられないのであらう。」

と嘆きあつた。文珠がこれに答へられなかつたわけでは勿論ない。世尊は嘆き合ふ俗物に向つて、

「もしこの眼で佛を見、この耳で教を聴くと答へるならば、有るといふ一面的な考へ方に墮ちてしまふ。また見る眼、聴く耳がないといふならば無いといふ考へ方に把へられてしまふ。文珠はそれほどのことは考へてゐる。默然として答へざるは則ち佛に答へる所以である。」

と警められた。

他の箇所では、「道は言説なし。これを以つての故に何を言ふべきかを知らず。」とも書いてゐる。さきの經は維摩の一默を説き、この經は文珠の默然を説いてゐる。

人間的な言葉が宗教的な境地を語り得ないどころか、これを誤ることが多い、といふことを教へるのは、「不立文字、教外別傳」に限つたことではない。道元禪師が「心をもつて計るべからず。言語を以つて言ふべからず」と言つてゐるのを別にして、親鸞上人が「行者の計ひ」を悉く拒けてゐるのなどその例は枚舉に遑がない。

人間的な思慮や言葉を計ひと呼んだのは面白い。法然上人の「一文不知」も「われ智慧のありなしによりて、往生の定不定を」計るべからずといふ教も、勿論このことを指してゐるに外ならない。

言葉によらずしては、人間は佛に近づくことはできないでもあらう。然し言葉によつては、遂に佛と相通することはできない。東洋の宗教で微笑や沈黙が如何に大きい意義を持つてゐるかを再省しなければならない。





私の出逢つた

囚人の純情

貴族院書記官

石橋徳作

	信	仰
實	話	

運轉手の自責から

昭和八年六月のこと、千住町の大通りの向ふから一臺の自動車疾駆して來た。丁度その時、三歳の幼児がヨチヨチと往來の真中に出て行つたが、周圍に居合せて、これを見た人達が思はず「アッ」と叫ぶ間もなく、その兒は自動車に跳ね飛ばされて、無慘にもその場で即死してしまつた。急停車した自動車から未だ若い運轉手が眞青になつて降りて來たが、すでに息のねの止つた幼児の側に立つて、ただ茫然とするのみであつた。

それから數日経つて、新聞は一勢に千住町で幼兒を轢き殺した運轉手が大島通ひの汽船

の上から身を投げて死んだといふ記事を掲げてゐた。千住の交通事故を知らぬ人々も運轉手の自殺を噂しあつた。彼が自殺して罪を謝す強い自責の念は、發見された遺書によく認められてゐた。彼の遺書によれば「不注意からあのやうな過失を侵した自分の如きは魚の餌となつて果てるのが本望である」といひ又「幼兒の遺家族には金千圓を贈るやう」にと云はれてゐた。

當時私は「一錢地蔵」の建立に奔走してゐた時であつた。昭和六年の秋、私の三男徳明（當時五歳）を不慮の死で喪ひ、それが機縁となつて、世の變死兒童の供養を發願し、百萬人の人々から「金一錢」づゝの淨財を募つ

て、「一錢地蔵」を建立しようといふのであつた。

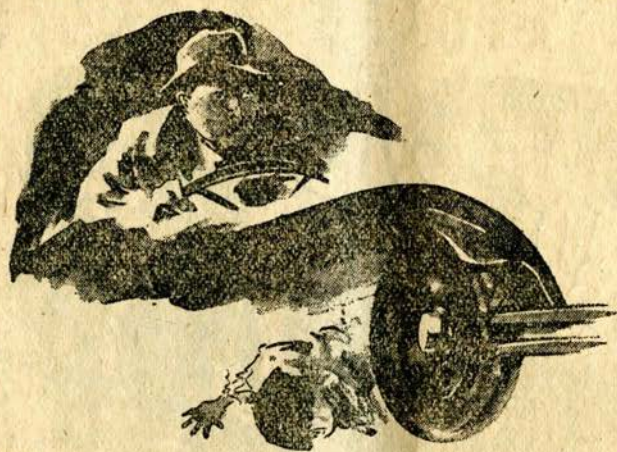
こんな時であつたので、運轉手が自責のため自殺した話を知つて、早速彼の故郷尾張に赴き、彼の両親とも逢つて、彼が實に立派な青年で苦學し刻苦勉勵に日を送つたことが判り、ここで私は、彼の供養と交通事故により命を落した人々の供養を兼ねて、同八年十一月十五日管財護國寺で、「大追善供養」を営んだ。この法要には眞言宗ばかりでなく東京の各宗の僧侶が参加せられ、又參列者は文部省、鐵道省、東京市等を初め各方面から集つて、僅に二千名以上となつた程盛大を極めた。この追善供養の法要が更に機縁となつて、

岡部集鴨刑務所長からの懇望により、私が集鴨刑務所で講演をすることゝなつた。私は運轉手の話「一錢地蔵」の話から親の子を思ふ心、特に不慮の死のために

愛兒を奪はれた世の親達の氣持等について講演を續けた。すると話を聴いてゐた

囚人の中にはすつかり感泣してしまひ、遂には慟哭する聲が起つて來るし、私自身も感極まつて講演を續けてゆくことが出來ず、結局中止せねばならなかつた程であつた。

斯くして私は集鴨刑務所を振り出しに、府中、名古屋を廻り、遂に北は北海道から南は九州まで殆んど全國の各刑務所で講演をして廻ることゝなつた。これは當時の鹽野行刑局長の依頼によつたわけである。



「童心に還りました」

北海道二見岡刑務所は網走町から更に奥へ

奥へと入つた山の中にあつた。

ここでは囚人になく、周囲に高い塼を廻らしもしない所であつた。昭和九年八月三十一日私は

ここを訪ねた。私は囚人と一織に風呂に入つたり等してから、

ランプの燈の下で例の講演を行つたが、皆涙を

が囚人の中には猫を飼ひ、自分の飯を割いて可愛がつてゐる者があつて、これが大罪人なのかと思ふに思はれた。

私はこの刑務所に信仰の對象がなかつたことに氣がつき、東京に歸つてから銀座で地蔵尊一體を買ひ求め、自分の室に一週間安置して、供養をした後で網走に送つてやつた。

するとそれから約一ヶ月経つて一囚人から手紙を受け取つたが、その大要は次のやうなものであつた。

「夜寢につくと毎晩毎晩母親が私の夢枕に立つて、如何にも恐ろしい顔をして私を見てゐます。私は相當査査のある家に生れながら罪をつくり、家名を汚しました。私の母親はこの私の行ひを非常に苦し、遂に他界してしまつたが、私は母の命日にさへ回向一つ出來ず限らない親不孝に惱んでゐます。

突然先生から私達に贈つていただいた地蔵尊が銷滅され、早速に私は地蔵尊にお詣りした。が、地蔵尊が恐ろしく思はれて何うしても拜めません。何うしたら心から拜むことが出

添して聞いてくれた。感激の一夜であつた。

翌日は囚人の作業を見學したりして歸つた

来るだらうかと、私は一週間眞剣に懺悔考へ抜きました。すると或る時、私は佛を拜むに、童心に還れといふ暗示を得ました。

この暗示を得て、私は判らないながらも、極力童心に還らうと思つて、色々の考へや懺悔を捨て、忘れるやうに努めました。そして次の禮拜日の時、教會堂に行つた際には有難く拜めました。

北海道のはてまでも、慈悲の手がとどき、我々を救つて下されるとは全く感謝の外はありません。春になれば地藏尊を祠るお堂が出来る予定です。さうすれば私達は毎日拜むことが出来るので、今から楽しみに待つてゐます。」

「私を結縁に入れて」

くさ い

昭和十年十月二十二日のこと小菅刑務所に



行き、講演をした。ここでも囚人達は大きな聲をあげて泣きくずれる者があつた。この時から除違つて私のもとに一連の手紙がとどいた。小菅刑務所に收容されてゐるものからの手紙であつた。その大要は次のやうなものであつた。

「私は信州下伊那郡飯田町で十七の

を唱えさせてもの罪滅しの一助にしてゐます。先生の御講演を聞いた時、最初は貴族院書記官の暇つぶしに來たものと思つてゐましたが、講演が進むに従つて何うにも耐らず、遂に大聲あげて泣いてしまつたのも、或ひは御承知のことと思ひます。

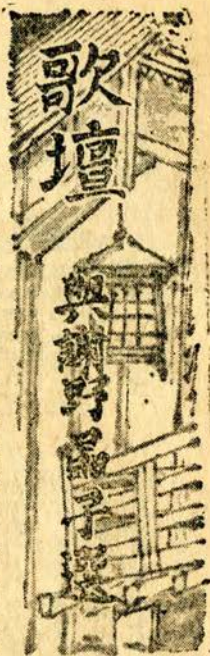
そして先生の「一錢地蔵尊建立の話を知つた時、是非とも私にも喜ばせていたゞたくせめて出所したなら少なくとも百人位の結縁者を得る自信があるので、一錢づつ集め寄進することを樂しみにしてゐました。

ところが當刑務所内の雜誌に「一錢地蔵」の悲願成り、すでに寄進者は百萬を越えたといふ記事が出てゐたので、何の位落膽したか解りません。

私の心を不感と思ひ、何うか百萬人の内の一人として私を加入させていたゞたく、金一錢をお送りします。」

而してこの囚人は毎年十一月二十二日になると必ず私に手紙を寄せるのだつた。

(文責在記者)



仙臺市 中村 幸子

わが庭の梨花の盛りをほめに來て
快よく鳴く蜂のむれかな

評 庭は眞白な梨花盛りである。蜜蜂のむれがその花下をブンブンうなつて飛び廻つてゐる。それだけの景であるが、この花を愛する作者の心には、蜂どもが花を觀賞しに來て喜び囁いてゐるやうに感じた。明るい快よい作である。

大阪市 水速ヒサ

つつがなく背子還り來ぬ一夜さに
大木の庭に生ひし心地す

評 歸還兵の裝のありのままの心情を吐露したものであらう。あなたが召されてから心細い寂しい生活が過ぎましたが、御無事でお歸りになつて、こんな嬉しい力強いことはない。まあたとへて云へば一晩で庭に大木がたのめしく生ひ茂つたやうな心持ちです。

北海道 花田 順佳

やがて身の終りとなるも願はくば
心靜かにわれ參らばや

評 作者は高僧の信仰厚い人である。百年の齡の迫るのを心寂しく思はぬこととはない。しかし信仰から得た諦観は、しづかに落つき拂つて、平和な中に世を去りたいと云ふ願望をもつて死に對してゐる頭の下がる作である。

朝鮮 靈江 八年 坊

瘦み萎えし足を曳きつつ農をする
銃後のわれや心は強し

京 都 堀 崇 禮

花畑にふと立ち入りて香を嗅げば
翁杖ふり怒る聲する

和歌山市 松 尾 察 道

すみ渡る朝のみ空を晴かぎりわが
もの顔になく雲雀かな

北海道 平 井 善 彦

うらうらと風一つなき春の日にち
り来る花の音のたかさよ

北 文 明 道

果てしらぬ大陸の野をひた押しに
日の丸の旗流れてゆくも

露邊兵 菅 原 潤 去
嘆ひし日の朝に似て夏帽をしかと
かむりつ街に出で行く

北海道 筒 井 戒 顯

鈴蘭の花盛りなり修道院この花の
ごと清く生きまし

館山市 安 田 保 治

みこころのあな尊や奉公杖賤はる
佳き日嗣の花さく

福岡縣 三 浦 壽 子

流習の兵愈へれば小父と小母何部
隊ぞと走り出で行く (二人の子を召
されたれば)

京 都 望 月 久 次 郎

修紀の國近江の里は一色の青き稻
田の夏となりけり

坂 根 ミ ケ 子

思はざる牡丹の花の一二輪ひらく
を見つしばしおどろく

北海道 中 村 も ん

幾世かも経たる老木の繁りあふ山
の温泉になれて親しも

札幌 野 崎 秀

降り續く雨を凌ぎて咲きいでし蝦
夷のあやめの紫の色

北海道 桐 原 一 枝

美しき稚兒にせばやと化粧しつこ
れが吾子かと母に見とれぬ

北海道 寺 田 順 山

たんぼばは堤を埋めて咲き出でぬ
やがて胡蝶も舞ひ出づならん

中 文 時 政 骨 人

このあたり甲板上を禁せられ大河
の水を船底にさく

京 都 永 田 七 郎

八十路越す母上なれど健かにわが
はく足袋を纏ぎて賤ひぬ

小 樽 中 村 茂 雄

山魚釣る川原しづかにせせらぎの
青澄む苔は滑らかにして

北海道 執 行 賢 眞

跳び廻る心もありてやるせなき蝶
のたはむれ春の風ふく

三重縣 青 木 桂 山

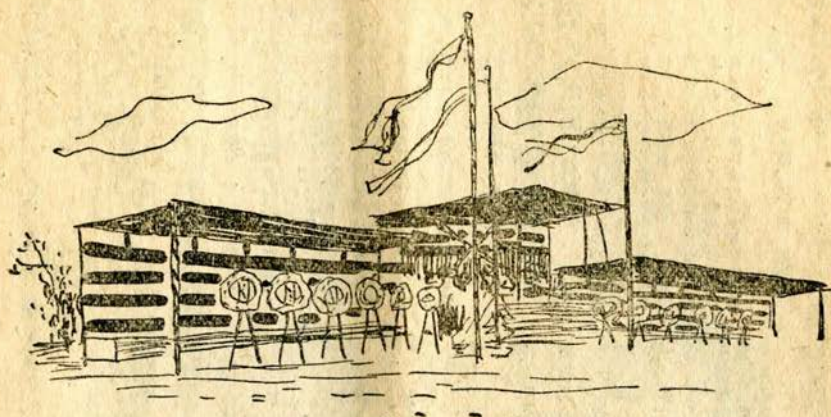
船出せし涅槃のゆふべ月さえて潮
の香たかし住吉の浦

東 京 淺 井 ま き 子

岸上のみてらに詠つ婦上の願ひは
いつか光はなたん

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯部取組係あて
に送ること。



▽前線實話△

部 隊 慰 靈 祭

—— 英 靈 よ 安 かれと
涙をながす ——

(一)

「起床！ 起床！」

夜の明けきらぬ静かな空気をふるはせて、不寝番の元氣な聲が聞えて來た。何處かで「起床の」聲がすると、あちらでもこちらでも不寝番の唳鳴つて廻る聲が、しばらく騒やかであつた。さつき交代したばかりの歩哨の銃劍が薄暗い哨所の前で、白く光つて見えた。晝間でも薄暗い支那の家屋の内は、未だ全然夜明け前である。その眞暗な中で、兵士達がモクモクと頭を持ち上げ始めた。

「もう起床かい。少し早過ぎるな——」
と起床の時には、何時も同じことをいふ兵士があつた。

「文句を云はずに早く起きろ」

これも相變らずの顔ぶれであつた。

「もう野砲が射ち始めたな」

「さつきから射つてゐるよ、夜中の銃砲聲を知らないのか、呑氣な奴には困るよ」

「すると野砲は夜あかしかな」

これにはドツト皆んなが笑つた。それでも

素早く起床動作が續けられていつた。

「おい、今度の慰靈祭に斑から誰が行くんだ

い。」

「未だ判らないよ。今朝發表がある筈だ。」

「慰靈祭に参列出来るなんて、うまくやつて
るな、健達に分までしつかりお詣りして來な
いと承知しないぞ。」

起床から點呼までの僅かな時間である。も
う殆んど點呼場に集つてゐた。

大體今度の慰靈祭には、なるだけ多數の
のを参列させるといふ等であつた。今度こそ
はお詣り出來ると、親の仇にでも逢ふやうに
皆が皆樂しみに待つてゐた。健が参列しない
では、死んだあいつに申し譯ない、健だつて
何うせ後からゆくのゆきづらくなる」とい
ふ氣持であつた。

それが昨夜のこと急に本部から電話があつ
て、代表者を参列させるといふことに變更し
てしまつた。情況の變化だから勿論止むを得
ないことである。しかし慰靈祭に参列出來ぬ
とは、全く口惜しいことであつた。班内では
昨夜からこの話で持ちきりで、今朝も起きる
早々この話であつた。

人員點呼が終つて、田直將校から部隊慰靈
祭に参列する代表者の發表があつた。第一小
隊から順次に官氏名が呼びあげられてゆく。

何うせ私が行けるはずがないと自分の心の中
で云ひ聞かせて、平氣で語らめるやうに自分
を納得させてゐた。それでも私達の小隊に近
づいて來ると、緊張して思はず息をのんで聞
き耳をたてた。

「第三小隊では、分隊長は平井重曹……」
グワンと囂られたやうな氣がした。確かに

私の名である、私が代表に選ばれたのであ
る、だが何んとなくほんとに出來ない氣持で
あつた。今度こそ慰靈祭に行かれるのだと思
ふと、久し振りに死んだ戰友に逢える氣がし
て嬉しかつた。自分の魂が早くもN市に飛
んで行つてしまふやうに思はれた。

「しつかり纏むよ」

と肩をたたかれて、得意になつて振り向く
と同じ行きたい氣持を押えて、我慢してゐる
顔に出逢つた。グツと熱いものを胸に感じて、
戰友に悪いことをしたやうに、申し譯ない氣

持になつた。

(二)

その翌日健達は慰靈祭に参列すべく中隊を
出發した。

慰靈祭は部隊本部のあるN市で執行される
中隊の宿營地からN市まで約五十二軒あるの
で、途中一泊の豫定であつた。宿營地から道
路まで未だ薄暗い道を歩いて行つた。その内
に段々陽が登つて野戰倉庫に着いた頃には、
全身グツショリ汗をかいた。小憩の後、輜重
隊の自動車に便乗して、先づN市の手前R村
に向つた。

自動車に進むに従つて、懐しい風景が次々
に展開して行つた。あの山の木も、この川の
草も抱きしめたやうな衝動にかられた。そ
の何れもが、そこを前進する時の苦心の跡を
物語る思ひ出であつた。岡や小山の限りなく
織く廣野は、まるで何年も住んだことのある
自分の家の庭のやうに憶はれた。しかし實際
はほんとに僅かの間に通り抜けた野邊であ

り、短い一夜を明かした山かげに過ぎないのであつた。

自動車隊はやがてR村に到着したので、私達はそので一泊した。明ければ慰霊祭當日であつた。私達は早くから準備を終えて、そこを出發した。

今にも降りさうな空

を氣にしたがら、徒歩

でN市に向

け道を急い

だ。汗とほ

こりで私達

の顔はすぐ

汚れてしま

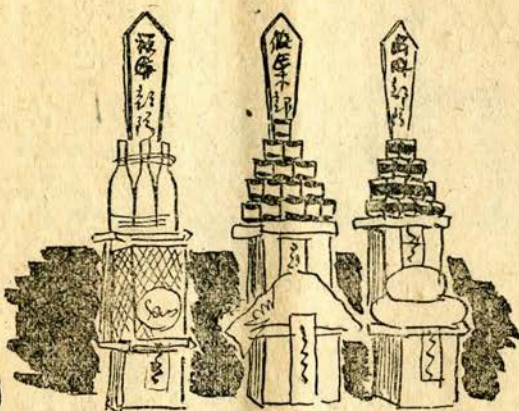
つた。やが

てN市がK

江の向側に

低く一線になつて見え初めた。

その邊から同じ慰霊祭に向ふ部



隊の陸續と行進してゆくのに出逢つた。中には整々たる隊伍を整え、喇叭を先頭に前進するものもあつた。

N市の入口に架つて、一軒以上もあるN市大橋の上は、次々に續いてゆく参列部隊の行進で眞黒くなつて見えた。

半年振りで見るN市は、すっかり整頓され、清掃されてすつかり立派になつてゐたばかりでなく、内地人の商店さえ小敷ながら開かれてゐるのには私達は驚いてしまつた。山奥から出て来て、急に繁華な街を眺めるやうに目をみはつてしまつた。冗談一つ云ふものもなく、眞面目くさつた顔つきをして街を眺め、道を急いだ。

突然一人が「バンだー」と叫ん

だ。なる程、パンを賣る店の前である。皆立ち停つて店に並んだパンを物珍らしさうに見入つて、感嘆するのであつた。

やがて祭場たる湖濱公園の近くに來たので、少し早いが飯にした。慰霊祭は、この公園の運動場で執行される。遙か向ふに大きな祭壇が見えた。私達は飯盒を抱えながら、祭壇は工兵が作つたのだとか、いや建築隊が作つたのだとか議論を始めた。

(三)

入場の時間になつたので、私達は埃を拂ひ、服装を正して式場に進んで行つた。

正面の祭壇には各部隊勇士の位牌が並んでゐた。その前に澤山な供物が壇上一杯にあげられてゐた。供物には雑多なものがあつた。中でも大小色々の罐詰が一番多かつた。その他には酒、ビール、サイダー等が秘立してゐたり、乾燥野菜の山もり等があつた。各部隊で苦心して、手に

入る最大級のものを用意して捧げた

に相違ない。

祭壇の兩側には二十數組の花輪が並べられてあつた。この花輪は紙を主な材料にして各部隊で造つた自慢のものであつた。兵士は實際器用なものである。私達は急造花輪の華麗さに感心してしまつた。

あたりが急に静かになつた。

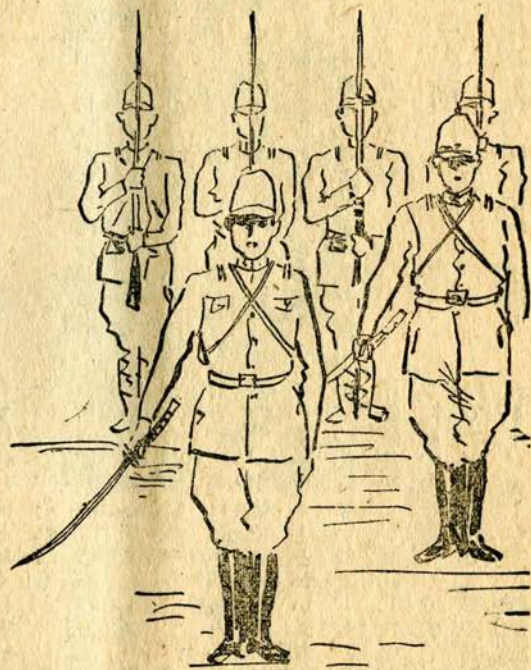
劉曉たる喇叭が響き渡つた。部隊長の入場であつた。

いよいよ式が始まつた。僧侶

が十數名壇上に登つて行つた。導師は野砲隊の黒田中尉が勤め、これに各隊の僧侶が続いてゐた。何れも軍服に軍刀又は銃剣を帯びたまゝ、上から袈裟をかけ、手に珠數を持つてゐた。式場は水を打つたやうに静まり、やがて讀經の聲が流れ始めた。

私達は心の中で護國の鬼となつた戦友達の顔を思ひ浮べた。亡き戦友を悼む心は、こゝ

湖濱公園祭壇に凝まつて一團となり、霧のや



うに天に登つてゆくやうに思はれた。又この英靈たちの心持を生かさうために、決つと魂敵を倒すぞといふ氣持が、式場からN市一ぱいに、N市から遠く前線に次々に擴がつてゆくやうな氣がした。私達は「その内に骨を荒野に晒して君達と逢ふだらう、それまで何處かで待つてゐてくれ」と祈るのだつた。

あやしかつた空模様はつひに細雨となつて

降り出した。雨でかすんだ式場では段々、式次が進んで軍隊禮拜を行ふ喇叭がなつた。前線に並んだ將校は、武勳輝く愛刀で一瞬に授け銃をなした。兵士は着剣して擦げ銃をなした。英靈よ、よく見てくれ、よく聞いてくれ、これが俺達の眞情のありつたのである。私達は泣くにも泣けず、たゞ／＼感慨無量さに胸が迫つて、離の筋肉がビリ／＼揺れるのを何うすることも出来なかつた。

讀經が止んで。部隊長が中央に進んで用辭を朗讀した。部隊長の朗々と式場一ぱい擴がるやうな聲にのつて用辭が続いた。部下を想ひ、英靈を悼み、武勳をたへる慈父の言葉に、私達は更に強く打たれるのであつた。兵士の中には仰いで祭壇を見ることが出来ないで、顔を伏せるやうにそつと目をふくものがあつた。あちこちから涙をかむ音がしばしば止まなかつた。

雨が稍強くなつて來た。

……子供にわかるお話……

阿彌陀さま (一)

佐藤 春夫



はしがき

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛——あみださまにお頼み申します、あみださまにお頼み。と人々はみなかう申しますが、一たい、阿彌陀さまに何をお頼み申すのでせうか。阿彌陀さまにお頼み申すと極樂浄土へ行けるといふのです。それでは阿彌陀さまとはどういふ佛さまで、この佛さまにお頼み申すとどういふわけで極樂へ行けるのか。その極樂といふのはどういふところか。それらの事どもを、毎月少しづつ、子供衆のために書いて見ませう。

(一) 不思議なお名前

阿彌陀さまといふお名前は呼びなれ、聞きなれては居り

ますけれど何となく日本はなれのしたお名前です。それもその筈で、それはもとサンスクリットといつて、印度のむかしの言葉のはじめの方だけを呼び慣はしてゐるわけで、詳しくいふとアミターブハアヤとかアミターユシュエとかいふのが本當のやうですが、この二つの言葉の上の方だけをとりてそれに阿彌陀といふ支那の字を發音のまま當てたもので、支那でお經を譯する人がアミターブハアヤとかアミターユシュエとかいふ原語の意味が深長で、適當な譯語が見つからないので、もとの言葉のままを阿彌陀婆耶とか阿彌陀度斯とか音譯したのがもと阿彌陀さまと呼ばれるやうになつたのださうです。いかに譯しにくい言葉らしいのですが、それでもアミターブハアヤの方は無量光、アミターユシュエの方を無量壽と譯して、それで阿彌陀さまの

事を無量光佛とか無量壽佛とかも申します。しかしそれではやはり意味が十分にはわかりません。無量光佛といふのは、この佛さまの持つてゐる光が量り知れないほどたくさんにあることをいふので、無量壽佛といふのは、

この佛の持つてゐる光が量り知れないほど多いばかりか、その光が消えやすいものではなく、量り知れない程の壽命を持つてゐることを言ふのです。つまり阿彌陀さまは、光明

の佛さまで、その光明はいく久しい生命があつて、いくら使つても使ひ切れないほど量り知れない分量のものであることを言つてゐるわけです。天地の間に満ち溢れ漲る光でそれも稲光などのやうに消えやすいものではなく、いつま



でも光輝を發してゐるその豊富な分量と、その旺盛な作用とを讃美したわけです。世界中で例へるものもない程に、明るい光を斷え間なく何時何時までも消えることなく持つて居られるといふのがこの佛さまの性質なのです。

この佛さまの光が世界中のどの片隅にでもどんなみじめな身の上の人の心のなかにも遍く射し、どんな事情があつても決してかきやきを失ふ事がなく、人間の闇を照らす大きな作用をするのです。この光といふのは、人間の智慧とか希望とかいふものを譬へて言つてゐるのではありますまいか。さうだとするとこの佛さまは一番大きな智慧と、何事にもめげない旺々な希望を永久に失はないお方といふ事になりさうです。それなればこそおすがり申しても大丈夫なわけです。

(二) 阿彌陀さまもとは

かういふ立派な佛さまで居られる阿彌陀さまも、もとはやはり人間でした。人間ですが、後にこれ程の佛さまに成られるだけに普通の人間ではなく、よほどすぐれたところ

のあるお人で、言はば家康と秀吉とを一緒にしたやうなお方です。さうしてお釋迦さまと同じやうに、もとは國王であつたらしいのです。何しろ遠い遠い、あまり遠いむかし事で、何もかもはつきりよく判るといふわけにはまいりませんから、阿彌陀さまがまだ佛さまに成られなかつた頃の御身分やお名前などもさまざまに傳へられて居りますけれど、今は無淨念といふ名の王さまであつたといふ傳へに従ひませう。

この王さまがお釋迦さまの前身に當る寶海梵志といふ方と、その子の寶藏佛との教によつて修行をして佛さまにならうといふ志を立てて法藏といふ出家になりました。

一たい出家といふものは、あらゆる世間並みの喜びを捨てて、その代りに自分の智慧や人格を磨き、この苦しい修行の出来上つたうへでは自分の智慧を一切の人類、いや生物の幸福のために捧げようといふ覺悟なのです。えらくなるためには人なみのたのしみ、かへりみなどはふりむきもしないで一所懸命に努力をする。それもえらくなつて、自分が何かうまい事をしようとか威張らうとかいふつもりではなく、人間一般の生活を向上進歩させ、世界をよくするといふ大きな理想のために、自分の苦勞や立身出世などを問

題にしないといふ立派な心がけと、その立派な心がけを實現するためにどんな苦しい目でも耐へ忍ぶといふ強い意志を貫かうといふ生活なのです。求道者、出家といふものは皆この通りですけれど、法藏といふ求道者は王の位をさへ捨ててしまつたほどですから、並大抵の出家や求道者以上に熱心でした。さうしてわが身が佛になり、ありとあらゆる生き物を教化したいから、そのためにはどんな艱難辛苦をもものとはしないといふ固い決心を師の前で打ちあけて、その決心のとほりの修行を刻々に勉めて行きました。法藏比丘は人格も智慧もだんだん出来て来て、法藏菩薩と呼ばれるやうになりました。比丘といふのは普通の求道者ですが、菩薩といふのはもう一とほり出来て来て、今少しで佛になれる人なのです。佛といふのはもと決して死んだ人をいふのではありません。人間の生れながらに具はつてゐる本當の智慧を純粹に保つて、人間の生活や世界の姿などをはつきりと悟つた人といふ事です。さうして佛になると、みなそれぞれに自分の理想のとほりの國をひらく事が出来るのです。そこで法藏菩薩は師や過去世の佛たちの援助の下に自分の國土を開かうといふ段になつてこの思案がまた一とほりの苦勞ではありませんでした。(以下次號)



東京蒲田區 森田 法 易

桑摘みの音バチ／＼と山家の夜

群 桑の枝をバチ／＼折る音が聞えてく
そして蠶時の聲夜を分たぬ忙しさがわ
かる印象明瞭な句。バチ／＼がよい。

東京市 三野 輪 幸 節

新緑へ長病の手をのばしけり

群 仰臥して、手や足を少しばかり動か
し得る程度の病人であらうか。それが
明るい新緑に對するあどがれから、手
の先にも新緑を感じようとして延ば
したものであらう。切なる心が痛いま
でに迫つてくる佳句。

名古屋市中村區 福田 廣 吉

古利根は田植の濁りひきにつけり

群 古利根の流の濁りが濁つてゐる。これ
は遠なる田植の濁水が流れてくるか
らである。これを表現するに「濁りあ
つめけり」といふ從來の表現法によら
ず「濁りひきにつけり」と流と濁りの接
觸する所の寫生に、忠實だつたのが動
きとなつてゐる。

岩手市 長岡 白 朝

春曉の水垂り止まる机説

小樽 平井 善 慈

花終へてより陶爐の日永かな

石川 西村けん治郎

出造りのひつそりとして桐の花

朝 野 李 鶴 烈

撫子よ小岩守りて鉢に住む

仙 藤 秋 月 浩 子

殍車よく揺れて淋しや春の旅

青 森 高 松 竹 堂

薬のんで若葉の光白くしぬ

名古屋 友 淵 青 歩

鐘の音をかきかねて池の藤咲きぬ

姫路市 鷺 津 光 子

轆車や讀み返すなるよき便り

京都市 山 田 白 波

神の苑みなびてゆく若葉かな

大阪市 森 正 義

銭湯を出て打ち仰ぐ春の星

京都市 堀 宗 禮

凹凸の山路となり花つゝじ

滋 賀 豊 田 千 代 子

米子 四方田 米子
忘路庵となる無事庵や初夏の風
京 都 錦 木 白 舟
鶏の鳥舎にかゝりぬ松の花
大 阪 辻 原 白 雨
煤にかすむ通天閣と鯉
東 京 浅 井 ま さ 子
山ひこか我を呼びしは山霞む
西 宮 市 林 朝 子
上陸の兄の日鷹が包ふなる
北 海 道 花 田 順 往
鶯の聲のまたなく夏の山
中 支 那 岡 秀 雄
狗の背を頭が歩く春日かな
島 根 上 野 水 滂
大吠ゆる山の彼方よ春の月
北 海 道 加 藤 潤 臨
春の日は部屋に満ちあり部屋に
大 分 石 堂 柑 山
老鶯に檻の花咲く峯つゞき
茨 城 長 島 洋
猫柳田水さら／＼明け来り
小 樽 中 村 ん
宿の浴衣大きくふかれ山女釣る
香 川 堀 家 傳 雪
水濡れを今日も濡しく耕せる
和 歌 山 井 爪 丹 峯
銀の柄に響きたりて揚雲雀

徳川 瀧 木 は ち
おきふしに老の念伊やあけやすき
京 都 多 湖 淵 楚 秋
五月雨やほと／＼古き木曾の宿
官製はがきに一回二句以内
とし「押上」編輯部併置係
あてに送るこも。

○會よりお願ひ○

一、訂正 六月號挿込みの振替用紙に會費一圓とあるのは一圓二十銭の誤りにつき訂正します。

一、前金制度のこと 本誌購讀のための會費は從來後拂ひの方がありましたが、必ず前金制度にいたしますから、前金切れの方は速に會費納入下さい。

一、代金引替お断り 書籍御注文の際は必ず料金前拂ひとし、代金引替は一切お断りいたします。

一、割引中止のこと 浄土宗讀本は會員に限り一割引でお頒ちしてゐますが、この特點を八月末日で締切りといたします。未だお申込みない會員諸兄はこの際速にお申込下さるやう願ひいたします。(庶務部)



土の
中
印
巴
國

…… 佛 跡 巡 禮 ……

阿^あ沙^さ茶^だ月^づの^の光^{ひかり}

野 生 司 香 雪

(文 と 畫)

すべてものを焼き盡す焦熱火宅のやうな印度の乾燥期も、やうやく終りをつけて、雨期を迎えることゝなつた。濁流滔々として渦巻く恆河の彼處に、もくもくと湧きあがる雲の峰は或る時は惡魔の貌の様に、又或る時は菩薩の慈悲相とも窺はれる。

こんな天象を渚に立つて靜かに眺め入つてゐる一人の沙門があつた。彼は遠い遠いあの西藏から世界の屋根と呼ばれてゐる險峻なヒマラヤの連山を越えて、遙々とこの印度の聖地に法を求めて來たのであつた。彼は今しも異境の空に、あの雲の峰を眺めながら冥想に耽つてゐたが、フト忘れものでも思ひ出したかのやうに我に還つて憧憬として水邊を離れた。

仙人掌の折れ重つてゐる畦道を彼は喘ぎ喘ぎ道を急ぐのであつた。通りすがの水汲む乙女に、彼は言葉をかけ

た。それは熙都ペラレスに出る道を尋

つた。

程なく彼は田の畔にばたつと足止めて何ものかを凝視し始め

た。そこにはコブラと稱する毒蛇が一匹の野鼠を捉えて、まさに呑んでゐるところであつた。沙門はこの淺間しい弱肉強食の場面をさまざまに考へさせられて、靜かに目を閉ぢ、何事か口の中で唱えてゐるやうだつた。やがて彼は再び足を急がせて唯見る曠野の中に寸人となつた。

思ひ出した様に野末に小さな村が、泥で造つた窓のない土の家が何軒か一團りになつて一つの部落をなしてゐる。

堀越しに外を眺めてゐる駱駝の顔は超然として、まるで人の世を嘲つてゐるかのやうで

ある。すぐその隣りに赤いサリー（着



ねたらしく、軽い會釋を残して過ぎ去

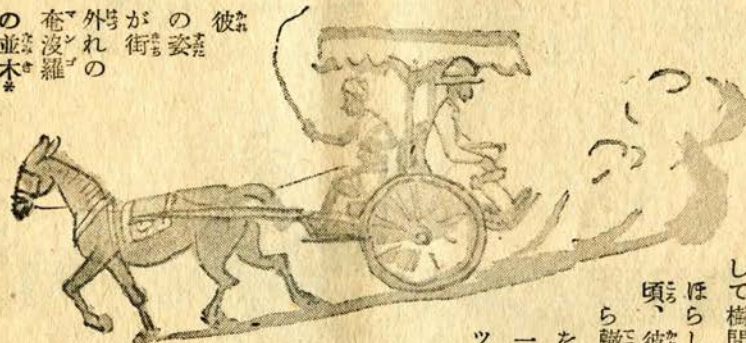
物)をつけた乙女が牛糞を水でこねてゐた。そしてこねては圓い固りを作り、これを壁に張りつけるのに餘念がない。壁に張つて干された牛糞は、やがて乾燥して燃料となるのである。

旅の沙門は、その家の前に立つて、鈴を振り、口に聖語を唱えた。鈴の音に氣のついた乙女は、井戸端に急ぎ手を淨めてから家に入つた。素焼の土器に米を推く盛つて沙門に供養した。沙門は人頭骨を切つて作られた容器を出して、乙女の供養を受け短い讃佛の偈文を残して去つた。錫杖の響きは一步一步ベラレスの街に吸ひ込まれて行つた。

遠い神代に大自在天の住はれたといふ、世にも尊きバラモンの聖地を尋ねた沙門は、苔蒸す石に低徊すること稍々久しくして、踵を返した。軒續く鍛冶屋の町に、哀調を帯びた民謡も天涯

の孤客に何物かかこつのであつた。程なく

彼の姿の街の外れの庵津羅の並木

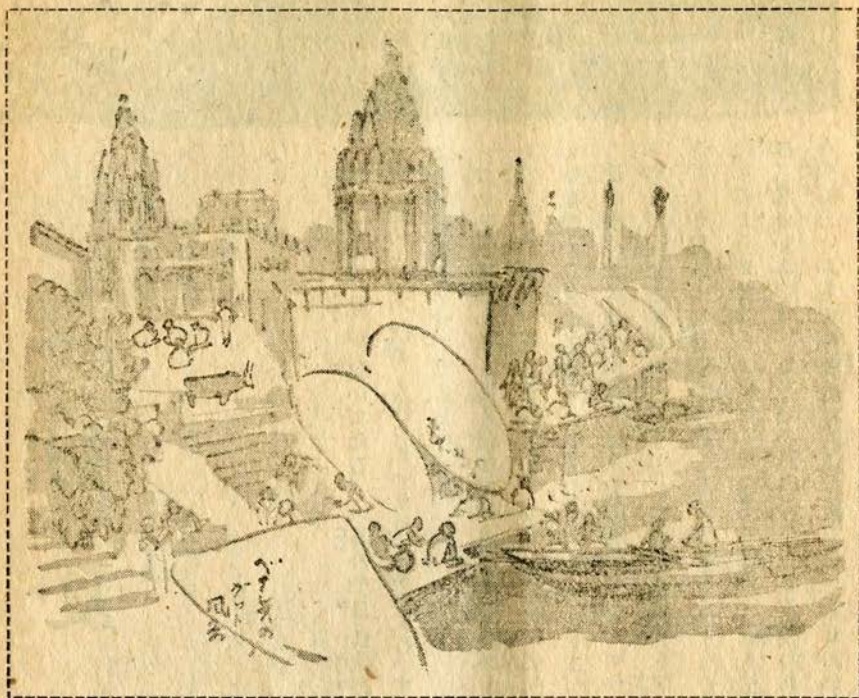


して樹間にちらほらして居る頃、彼の後から轍に黄塵をあげた一輛のエツカ(馬車)の一種)車上に

はヘルメットを冠つた日本人らしい旅行者があつた。等しく佛の靈跡を尋ねるのであらう。晝下りの陽にせつかれて、早くも聖跡鹿苑の丘に迫つた。

二千五百年のむかし、世尊がブタガヤに成道せられ、先づ五人の比丘を濟度せんとの鹿苑に尋ねた時に、世尊を迎えたいみじき所として、今も尙傳えられてゐる迎佛塔に辿りついた沙門は、宿願を漸く達した如くに安堵の眸を輝かせて、森の彼所に見ゆるスツーパー(法塔)を眺めた。彼は威儀を正し、錫杖を持つても嚴かに歩を進めて行つた。

法燈滅して千年、古藪累々たる廢墟の跡に立つて、今は昔大聖世尊の玉歩に觸れた、み土だとはかり沙門は靴を脱ぎ、五體投地の禮拜を繰り返して時を移す、この感慨無量の彼の背に西に傾く赤い陽が惜し氣なく照らしてゐ



た。
書頃エツカ
によつて道を
急いでゐた日
本人らしい旅
行者は、この
光景を十六ミ
リ撮影機に収
めてゐた。こ
うした聖地に
旅する佛教徒
にして、現代
文化を誇れる
インテリの、
或る者は觀光
の意味で、又
ある者は研究
の對象とし
て。信仰禮拜
の香りの薄い

ことは歎かましい。獨りセイロン、ピ
ルマ、西藏から、山を越え海を渡りて
来る巡禮は、感極まりて去るに忍びな
い敬虔さが、しみみく窺はれる。
この祖國を異にする二人の旅人は、
程なくして紺碧の丘に聳え立つムラガ
ンダリチ、ビハーラ（初香殿寺）に前
後して入つた。旅人は寺の番僧に十ル
ビーの紙幣を渡して、外陣に見上ぐる
釋尊一代記の壁畫は遠く日本から來
た、同胞の筆になつたと聞き、興味づ
けられたる如く隈なく見終りて參拜名
簿に署名して、寺男に導かれ法堂の中
に消えた。香烟たゆたふ内陣近くに、
異國の沙門は須彌壇上に光顔顯々たる
說法印の本尊を仰いで長跪禮拜讀經の
動行を始めてゐた。外は全く夜のとな
りに覆はれて、空には阿沙茶月の満月
が靜かにあれにし後を照してゐた。
「法音を秘めたる塔や苔の花」

隨筆

初夏靜念

吉田 絃二郎

裏の竹山で鶯が鳴いてゐる。六月の七日武蔵野に鶯を聴くといへばやゝ珍らしいやうな氣がする。すこし今朝は涼しいせいでもあらうか。

麥は熟れて裏の畑も鎌を待つてゐる。薄露のかゝつた朝など郭公や三光鳥を聴くが、今年はまだ三光鳥は三四度鳴いたきりである。

庭の隅に亡くなつた妻が植ゑた紫陽花が咲くやうになつた。朝ごとに庭に下りて露を帯びた紫陽花を眺めてはもの思ふのも凡夫のあさましさであらう。

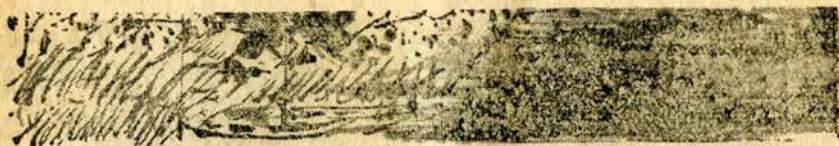
このころ或る女の人の話してゐるのを聞くと「夫婦は二世といふのは、さういふ風に考へさせて置かないと夫婦といふものは何時別れ／＼になつてしまふかも

知れないからである」といふのである。この考へ方は近代的な女性たちの一面をあらはしてゐやう。

この女の人の考へ方には相當の理由もある。しかしそのまゝ受け容れることはできない。夫婦は二世といふことは教訓的、方便的な考へからのみ生まれたことではあるまい。夫を失つた妻、妻を失つた夫たちの間には、何としても死後の再會を望んで止まない人々も多いことであらう。さういふ人にとりては夫婦は二世といふことは方便でなく欲求であり、祈願である。悲しくも現世に於いて別れた人たちは二世三世の後までも廻り逢ふであらう。

夫婦の間のみとは限らない、親子は一世といつても、





眞に亡くなつた子を悲しむ人にとりては、親子は二世とも三世ともなつて現に來るであらう。淨土を方便と考へる人には方便としてのみの淨土が現じ、淨土を眞實在と感じる人には淨土は實在として現じるであらう。網島梁川は「われ神を見たり」と言つた。梁川はたしかに神を見たのである。神を見ない人がいかに神を揣摩憶測しても神の姿はわからない。神を見ることができない人は神は存在しないといふ。實際そのやうに人にとりては神は存在しないのだ。神を見た人にのみ神は存在する。

X

淨土門から入る道は容易であるといふことは常識になつてゐる。しかしやしくも道といふ以上は相當の苦難は覺悟しなければならぬ。受け容れて下さる方からいへば兩手をひろげていつでもわれ／＼凡夫を受け容れて下さるのであらうが、凡夫自身としてはそれでは相すまぬ。自分自分にできるだけのことは努めて後大慈悲の懷に抱かれなければならぬ。

土足のまゝでも受け容れていたゞけるとしても、せ

めて手足だけは綺麗に洗つてから門をくぐるのがせめて凡夫の心がけであらう。

できるだけ善根を積む、懺悔をするといふのも畢竟この手足を洗ひ淨めるほどのことであらう。

X

わたくしたちが子供のころは水道といふものはなく山の泉を掬んで來たものである。學校から歸れば二三丁の坂道を登つて水を掬みに行くのが日課の一つであつた。大人の擔ぐ手桶を、紐を手繰つて短かくしてよるめきつゝ山の眞清水を掬んで來た。母はそのやうな折、いかにもうれしさうな顔をしていたはつてくれたものである。母のよろこびの眼を見るのがうれしくて痛む肩を我慢しては二度三度と山の井のところまで手桶を擔いで行つた。

そんな鹽梅だから一滴の水も大切にすることを教へられてゐた。

數年前の夏のことであつた。武藏野は大旱魃で陸稻といふ陸稻は悉く枯れてしまひ、井戸の水といつては鐵瓶一杯の水も容易に得られなかつた。



東京から来た客人のために、水饅頭のわけを言つて洗面用の水を出すと、客は「さうですか」と言つたまゝ洗面器にあふるゝ程の水を無造作に使つて惜しげもなく地上に捨てるのであつた。

東京の人たちは永い間水のありがたさを忘れてゐる。

洗面器の中に凡そ三分の一ほどの水を入れば顔を洗ひ手を淨めるには充分である。洗つた水は捨てないでさらに洗濯用に使ふ。洗濯に使つた水はさらに鉄や鎌を洗ふに使ふ。さらにその水を庭に撒くか、畑に撒く。

わたくしたちはかういふ風な水の使ひ方を教へられそれに馴らされて来た。

一碗のお茶を出す。最後の茶の一滴まで味つて喫むお客もある。尊い客人である。

また中には何の關心も拂はず喫み捨てる客人もある。新しい教育を受けたといふ人たちは多くこの種の部類へ屬する。

人生に生まれて来て一日一日、一刻一刻の生存をありがたく、尊く噛みしめて生きてゆく人もある。

人生に生まれて来て何のありがたさも、尊さも感じないで死んでゆく人もある。

前者は現世に淨土を見ることのできる人である。

後者は永遠に淨土を見ることができない人である。

電車に乗つてゐて坐席をゆづられた時心からよこびを感じる人がある。淨土の人である。

人に坐席をゆづつていたゞいてもうれしさうな顔もしない人がある。穢土の人である。

わづかな人のやさしい心によこびを感じる人は、やがて大慈悲の眼を見ることが出来る人である。

感恩の念を持たないといふことは人生の最も大きな不幸である。

x

見も知らぬ人が、たま／＼同じ車に乗り合せたばかりで、親切を施してくれる。こんなありがたい奇蹟が人生の外にあらうか。雑踏した車の中にも淨土はある。

見も知らぬ人がたま／＼歩いてゐて、見も知らぬ人の墓に合掌して通り過ぎる。こんな美しい情景がこの



人間界を外にして何處にあらう。人間淨土である。

この世界には提婆も生きてゐる。イスカリオテのユダも生きてゐる。しかしこの世界には舍利弗も住み、マгдаラのマリアも生きてゐる。

×

また近くの森を歩いて見るとエゴの眞白な花が咲きはじめた。散りはじめた。

エゴの花はたゞ地味な單調な花であるばかりで、人の注意も惹かぬやうだが、初夏の武藏野を歩いてゐる者にはなつかしい花である。

野苺の花、姫紗羅の花、くこの花、ぐみの花といふやうに初夏の花は白く、かすかに、あはれである。それだけに何となく心に迫るものを感じる。

昨日も今日もそして明日もわたくしはたゞ獨り武藏野を歩むであらう。野苺の花! エゴの花もこの旅人の心を受け容れてくれるであらう。誰を待つともなく、たゞひとり白い雲をながめつゝ日も日も武藏野を歩む自分自身の姿をじつと省ることもある。

濡れる

潜水夫「雨に濡れるといけぬから今日は休業だヨ……」





地獄に墮ちた紫式部

高瀬承嚴

今から四百七十六年前の四月、京都のたゞす河原では、あるお堂の再建資金を得る一つの方法として勸進の申樂能が開始され、その中の一番として『源氏供養』といふ一曲が加へられてゐた。この一曲の作者は、二三の異説はあるが、頗る天分に恵まれた諸曲の大成者世阿彌であると傳へられてゐるだけであつた、その構想も詞曲も立派なものである。この時に演じた役者が誰であつたかは明らかでないやうだが、この一曲を観た大家、殊にいくらかでも文學趣味のある人々は、觀てゐた間は、云はゆる技、神に入る項みであつたやうな演技に殆ど魂を奪はれたやうに緊張してゐたのであつたが、この一曲が終り、気分がくつろいだと思ふとともに、事のあまりにも悲痛極まりないのに驚いて、しばし面をあげ得るものなく、同情の涙にむせび泣いたといはれてゐる。かくも大家に感激を與へた『源氏供養』といふ一曲は、一體何

事述べたものであつたか。これは我が文藝史の上下空前絶後の傑作世界にも比擬ないといはれてゐる源氏物語の作者紫式部が、讀者をして無限の感興に耽らしめたいとの念願から、創作意欲をあまりにも發揮したため思はず知らずの間に、佛教で極力戒めてゐる狂言や雑語を續發的に使用し、讀者をして一讀三歎、巻を捲く能はざらしむるまでに熱中せしめたのと、こんなにも狂言、雑語を以て作り上げながら、作品中に出てくる此の物語のヒロイン光源氏を始め多くの人物の行爲を作意的に改めながら、それを謝するため追善供養を行はなかつたため、作者の紫式部は、聞くさへ恐ろしい七寒八熱の苦を受ける絶え間ない地獄に墮ちたから、何とかしてこの苦しみを免れたいと思ひ、式部の七霊が、當時日本第一との評判を受けてゐたお説教師で、しかもこの頃、智恵第一と佛教徒の間に評判高かつた淨土宗の開祖法然上人と親交

のあつた聖賢法印の夢枕に立ち、光瀝氏を始め、作品中に出てくる人々のため、妾に代つて追善供養を行ふとともに、地獄で苦しんでゐる妾を救済して淨土に生れ得るやうにしてくれと頼んだから、法印は彼の女のために一座の追善供養を行ひ、彼の女を地獄の苦から脱せしめたと云ふのである。そして『滅氏供養』で終りのところに、この紫式部は、ほんとうは觀音様が化身となつてこの世にあらはれ、あの物語を作つて、娑婆の人々をしてこの物語を讀ましめ、成佛得脱の縁を結ばしめたのであると述べてゐるが、觀音様の化身が地獄に墮ちたといふことは、一見したところ何となしに矛盾があるやうに思はれるが、このやうな矛盾した物語は、この夢物語が出たころ、まだほかにも出てゐる。



金

に依りて行はれた、渡洋爆撃のニュースを聞いた時、又最近の歐洲戦争に於ける獨逸の電撃隊の如く、民衆にとてもお話にならないほどの甚大な、感傷的なショックを與へたものであつた。この一曲は、昭和時代になつて、作者が單なる興味中心に作りあげたものではなく、入る目をも呼び返したと云ふ清盛の勢力も地に落ち、瀝氏の勢力が増大して來たあの目まぐるしい平安末期から鎌倉初期の世相の半脱を述べたものであつて、たまたまその一例としてこれを取りあげたものである。ところで當時、文學を愛好してゐたある人の夢枕に、地獄の苦しみに堪えられず救を求めた紫式部が訪れたため、その人が發起となり、當時知名の紳士や貴婦人を勧誘して紫式部の亡靈救済、拔苦與樂超生淨土を祈るため、法華經二部十六卷五十六品がそれぞれの人々によりて分擔して書寫され一品ごとにその巻頭に瀝氏物語五十四帖の大意をとり入れた短歌と圖繪とが、當時の關係者に依りて作られて書かれ、完成した時、ど

こで行はれたかは明らかでないが、ある寺に納められ、一座の追善法要とお説教とが行はれた。

參會者は、その莊嚴な法要、その肺腑を衝くやうな紫式部追善法語に感激の涙に嘸んだと傳へてゐる。平康親の寶物集や、藤原信實の今物語なその記事及び、この法要の時讀まれたといふ澄憲作と傳ふる源氏一品經表白、澄憲の子である聖覺が作つたと云はれてゐる源氏供養表白などは、この一曲の材料となつたもので寶物集今物語の作者は何れも、この事件に參與した人々であつたやうである。

兩書の記事は多少出入はあるが、その云はんとするところは全く同様で彼等も又、この物語を書くには、感激にをのく筆を辛ふじて馳せしめたと思はれる跡を偲び得るものである。

一體、紫式部が、源氏物語を書き上げてからに約二百年を経過した時、作者が知りもしない人の夢枕に立つて救を求めたといふことは、何となく聞きとれぬ感じがしないではない。

傳へるところに依ると、紫式部は、石山寺に參詣し、一夜を觀音様の御前でおこもりしてゐると、何とはなしに、何か書きたいとの氣持が湧いて來た、けれども、持ち合せの紙もないので、觀音様の前にうづだかく積まれてあつた六百卷の大般若經を拜信して、その紙背に浮び出づるまゝを夜を日に繼いで書き上げた、これが源氏物語であると云はれ、今日では、石山寺へ行くと觀音

堂の一隅に源氏の間なる一室まで設けられてある。

このやうに、紫式部は、創作意欲が、觀音様慈識中に出て來たが書くべき紙がなかつたので觀音様も妾の氣持は十分に知つて下さると獨りできめこんで、勿體ない御經を無斷で使した罪はろほしに彼の女は大般若經一部を寫して石山寺に納めた。

その御經は今に傳へてゐると、これも鎌倉時代に出來た國寶石山寺藏起に書かれてゐるが、この三寶物の一である御經を、小説の原稿紙に使用したといふ罪と、讀者をして心ゆくまで感興に飽かしたいとの一念から、相當色々な事實を狂げて、云はゆる佛教で嚴重に戒めてゐる狂言や繪語を筆の走るままに盛に書きちらした。

従つてこの物語を讀むに幾百幾千幾萬といふ數知れぬ人々をも思はず知らずの間にうそ、いつはりに導き、知らぬ間に地獄へ行く手引をしたといふ、云はゆる誘探の罪を犯したことに依り、紫式部は地獄に墮ちて日々夜々に苦しんでゐるとの傳説が、いつとはなしに宣傳されて來た。

このデマは一體どうして出て來たか、これももとより瞭らかではないが、この頃是我が國では國內の狀態が頗る複雑怪奇を極めた時であつたことは國史の示すところであり、一方佛教では、云はゆる佛教の時代觀である三時思想の末法になつてから間のない時で、三國傳來の生身のお釋迦尊であると深い信仰を捧げてゐた

龍巖釋迦堂の本尊様までが、日本も末世になつてから世相と云ひ、人心と云ひ、とても悪くなつてから、儼はもう日本に居るのがいやになつた。

一日も早く生れ本國の印度に歸るのだとある人の夢枕に立つて云はれたとのデマが飛び、都の人々は云ふまでもなく、遠方からも、御覽乞ひの御参りだと云つて龍遊堂へ集まる人で京都から龍巖へ行く道は人で満ち往來が出来なかつたと云はれてゐる。

衆生濟度の佛様が、いやになつたから歸るんだとはどうも聞きとれぬマユツバものではある



が、この時代はこんなデマが平氣で行はれてゐたほど、人心の動搖が激しかつた。

このお釋迦様の印度歸りのデマと、紫式部が救済を求めたとのデマは殆ど同時に出現した、かかる流言蜚語は、今日ならば省令廳で禁止されることであるが、此の時代ではそれからそれへと色々な造言が展開してゐた。これは前にも云つた如く、當時頗る變態奇を極めてゐた國情と、佛教の末法思想とがコンデンスして出て來たものでこの安定を缺いた人心を泰山の安きに導いたのが永い間、比叡山で修行して居られ、この世相を見て山を下り、都をあちこちと転々して民衆教化に努められた法然上人であつた。

法然上人御法語

孝養のために精舎建立のいとなみを、なすことなかれ、心ざしあらば、をのを群集せず、念佛して恩を報ずべし。もし群集あれば闢諍の因縁なり。



私の健康法

文學博士

井上哲次郎

生活は規則正しく

健康法といつても、體質によつて違ひ、年齢によつて違ひ、職業によつて違ひます。それに健康といつても、肉體的と精神的との違ひもあり、一概に簡單にいへるものではありません。私は學者で、教授をやつてゐるもので、私の健康法は外の職業の人に當て嵌らないこともありませう。

私は今年八十六歳で、何の宿病もありません。以下順を逐うて、私の健康法を述べますが、皆様の御參考になれば幸いです。

日常の生活は非常の場合を別として、成るべく規則正しくしてゐます。人間は機械のや

うにきちんと／＼とはいかぬけれども、衝動になつてはいけません。どうも不規則や衝動な生活は、決して長壽を保つ所以ではありません。

適当な運動を

私は運動を怠らぬやうにしてゐます。家屋内にゐる時は、晝間で屈伸法をやります。屈伸法は自分で創案した體操で、兩脚を開いて立ち、各關節を充分に屈伸させるものです。これはさう時間も要りませんし、關節を圓滑にして、硬張ることを防ぐので、大變に必要です。

又雨天や風の強い日以外は、努めて戸外に

運動に出掛けます。人道のある所を道順に進んで、一里から一里半位の所を歩くのです。人は老境に達すると、とかく脚部が弱る、脚部が弱ると、どうしても運動不足となり、運動不足となれば消化器の働きが鈍くなり、新陳代謝の障礙を來たし、その結果全身の衰弱となります。

年齢により衛生法を決める

私は青年時代には體操をやリ壯年時代には冷水浴をやつて約二十年間も続けましたが、七十七歳頃から止めました。それは冷水浴が高齡なものに強烈すぎるからですが、この壯年時代の冷水浴の効果は今に至つて残つてゐるやうです。青壯年の方には冷水浴を勧めたいのですが、その出来ない體質のものは冷水摩擦でもよろしい。

私は近來「げんもしょうこ」をお茶の代りに常用してゐます。その中に煎麥を入れて、食事の際にも飲みます。これは消化器の活動

を促すので、高齢者によく、又夏の暑い時に一層必要です。胃腸が弱つても餘り強い薬物は避け方がよいのです。南宋の朱子は晩年によく秘結したため下痢を飲んでゐたが、或る時この下痢が容易に効かなかつたので、餘り強い下痢を用ひ、これが礙つて死因となつて七十一歳で亡くなりました。

又白井光太郎博士はなか／＼醫學の士であり、健康も自慢する程よかつたのですが、自分で不老長命の薬だと考へてゐた烏頭を、或る日多量に用ひて七十歳で他界されました。こんな危い薬を用ひないのが長壽を保つ所以であります。

要するに高齢になるとあまり

強烈なことは控へ目にすることがよいのです

業務に勤勉努力せよ

私は平素年齢のこと等はそちのけにして、ただ學事に勤勉努力してゐます。年々年中

休日なしに、ぶつ通しです。私は學者で、研究が一番面白から、いつでも勉強してゐるわけで、何よりも書齋で研究するのが一番楽しいのです。私は學問が好きで、止めることが出来ないのですが、これが私にとつて一番有力な衛生法であります。



易經に「天行健なり、君子以て自強して息を絶えず」とあるやうに、人は絶えず業務にいそむことが、健康法の上乗なるものと信じてゐます。この點で學者は平素死生を超越し、命のあらん限り努力してゐるわけです。學者で

ないものも、それ／＼の業務に熱中すれば、矢張り同じことです。英國のラッソルン・ミスが六十歳から九十歳までの衛生法といふ書物の中で「勞働と節制と満足と、この三者が健康、幸福、長壽の主因なり」といつてゐます。尤も學問はその對象が廣大無邊、愈々究むれば愈々深きを知るので、満足するところはあります。

感情を平靜に保つ

青壯年の時代には少々感情の激發があつても何の障りもないのですが、高齢に達するに従つて感情を平靜に保つ必要があります。或る有名な教育家が激怒して書生を叱つてゐる際に突然腦溢血を起して斃れた實例もあります。古人が「仁者は憂へず」といひ、又「仁者は壽なり」といひますが、まあ一體さうであるかと思ひます。心痛、懊惱、憂憤、悲愁、激怒などが天折の因となり易いといへます。古人に例をとれば、孔子は七十四歳、孟子は八十四歳、老子は何歳か分らぬが、なかなか

かの長壽の人であつたし、ソクラテスは七十歳、プラトンは八十歳、カントは八十歳、ゲーテは八十三歳（日本の算へ方によれば一歳加ふべきであらう）であつたし、又釋尊は八十歳、法然上人も八十歳、親鸞上人は九十歳で、このやうな人々は仁者の部類に屬し、何れも長命であつた。ソクラテスは若し殺されなかつたなら、ずつと高齢に達したでせう。

けれども、鐵回（てつかい）は三十二歳、中江藤樹（なかつかふし）は四十一歳で、この人達は短命であつた。それで仁者は壽なりも當てにはならぬが、しかし胸中（ちゆうちゆう）平靜（へいじやう）にして苦悶（くもん）のないことは、確かに長壽の一因（いちいん）として有力なるものであります。

平生衛生（へいぜうせい）に注意す

私は平生衛生（へいぜうせい）に注意することを怠りません。折々（時々）寒暖計（かんんだんけい）を見て衣服（いふく）の調節（てぎよう）を誤らないやうにすること、妄（あや）りに生物（せいぶつ）を食（た）べないやう氣（き）をつけること等で、生物（せいぶつ）を用心（用心）するのはチフス菌（チフスきん）だの疫痢菌（えきりきん）は口（くち）から這入（はい）るからです。しかし世（よ）の中にはさほど衛生（せいせい）に注意（ちゆうい）を拂（は）は

ないで、百歳（ひゃくさい）の長壽（ちやうじゆ）に達（た）した人もありますがかゝる人は多分（たぶん）生れつき健康（けんこう）で、いつとはなしに百歳（ひゃくさい）の長壽（ちやうじゆ）に達（た）したのではないかと思ひます。しかし生れつきが體質（たいしつ）薄弱（はくじやく）であつても平生（へいぜう）多少（たうしやう）衛生（せいせい）に注意（ちゆうい）し、失敗（しぱい）しないやうにすれば、案外（あんがい）、長壽（ちやうじゆ）を保（たも）てるものです。明治時代（めいじ）の漢學者（かんがくしや）だつた東野成高（とうのなるたか）は八十四歳、其原益軒（そのはらえきけん）は八十五歳の長壽（ちやうじゆ）をそれ／＼保（たも）ちました

が、兩者（りやうしや）とも體質（たいしつ）が弱（よ）い方（かた）であつたのに、衛生（せいせい）に注意（ちゆうい）し晩年（ばんねん）壯健（ちやうけん）になつた人（ひと）であります。高齢（こうれい）になればなる程（ほど）、尙史（しやうし）に衛生（せいせい）に注意（ちゆうい）することが必要（ひつやう）です。そして永（とこ）く健康（けんこう）を保（たも）ち、蘊蓄（うんしやく）を傾（かた）けて國家社會（こくがしやうかい）のために盡（つ）さなければなりません。そのやうに健康（けんこう）で一年（いちねん）でも長壽（ちやうじゆ）を保（たも）つて活躍（かくげつ）することはなかく大切（たいせつ）なことで、こればかりは幾程（いくしやう）金（かね）があつても金（かね）では買（か）へません。

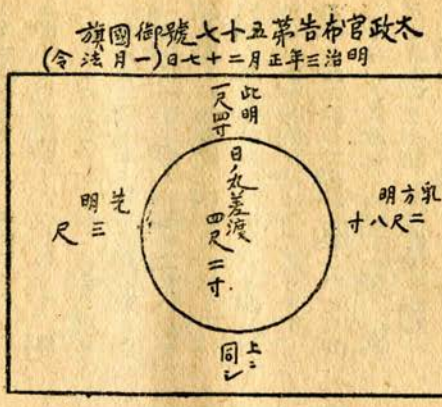
ドイツのイェナ大學教授（いゑなだいがくけうじゆ）フエランドは長壽學（ちやうじゆがく）といふ一學科（いっがくこ）を建設（けんせつ）せんと志（こころ）し「マクロビオタイツク」といふ書物（しよぶつ）を著（しよ）はし、今（いま）でも大變（たいへん）に有益（えきえき）な衛生書（せいせいしよ）です。

以上（いじやう）で大體（たいたい）健康法（けんこうほふ）の話（わたり）は終（お）りますが、如何（いか）程（ほど）長生（ちやうせい）きしても裸身（はだかみ）で人の厄介（やくかい）になるやうでは遺憾（いたん）なこと（こと）です。それで平素（へいそ）衛生（せいせい）に注意（ちゆうい）して健康（けんこう）を保（たも）たねばならぬ次第（しだい）です。しかし健康（けんこう）で長生（ちやうせい）するだけでは意味（いみ）がないので、何（なん）うしても生き甲斐（がひ）があるやうでなければなりません。即ち各自（各自）の長ずるところによつて、社會國家（しやうかいこくが）に何物（なにもの）かを貢獻（けんけん）することを努力（なかり）せねばなりません。そして初めて生き甲斐（がひ）のある生命（せいめい）となります。斯（かく）く人は各々（それぞれ）自分の長所（ちやうじやく）を以（もつ）て社會國家（しやうかいこくが）のために盡（つ）すことが健康法（けんこうほふ）として最も効果（こうか）的（てき）であります。

なほ注意（ちゆうい）すべきことは、同じく生命（せいめい）といつても肉體（にくたい）的（てき）と精神（せいしん）的（てき）との二方面（にへつぺん）のあることです。肉體（にくたい）的（てき）生命（せいめい）も大切（たいせつ）ですが、精神（せいしん）的（てき）生命（せいめい）はなほ大切（たいせつ）です。老子（らうし）が「死（し）して而（しか）して亡（な）して亡（な）びざるものは壽（じゆ）」といつてゐるのは、蓋（おほ）し精神（せいしん）的（てき）生命（せいめい）をいつたものでせう。精神（せいしん）的（てき）生命（せいめい）は永遠（えいゑん）無窮（むきゆう）のもので、人は永遠（えいゑん）無窮（むきゆう）の生命（せいめい）を以（もつ）て肉體（にくたい）的（てき）生命（せいめい）より遙（はる）かに重んずべきことを知らねばなりません。

第一圖

中旗寸法 (曲尺)



比定
流一の堅七 日章の太々
風下餘幅流の 堅五の五分三
百分の二

七月十一日は皇紀二五十四年、今から八十六年前徳川幕府の指令に依つて日の丸をお國の總印として決められた國旗創定記念日であります。明治御一新の政府は總てを新しくす

正し

國旗の知識

小橋麟瑞

る意味に於て太政官布告第五十七號郵船商船規則の別形郵船商船に擧ぐべき「御國旗之事」を制定されたのが、明治三年正月二十七日で我國の國旗に關する唯一の法令であります。

我國の國旗に關する唯一の法令であります。國旗の事に就てその構想的思想的に淵源を尋ねると遠く皇祖發祥の昔に遡らねばなりません。が、具象的に顯はれたのは後醍醐天皇の笠置御幸の時お用ひになつたのが最初だと傳へられてゐます。この國旗は今尙大和の郷家に秘藏せられそれによると白地に日の丸で丈三尺一寸七分、幅二尺二寸三分で、丁度五月帳のやうに上と横に乳が附けてあります。現在の日章旗と大體同じ落好で縦長と、横長の違ひだけであります。

それから二百餘年、川中島の戦役弘治元年の七月には上杉謙信と武田信玄とが兩方とも日の丸の旗を押し立てて、吃驚錯合せをやつたといふから愉快な話です。この外、屋島壇の浦で船に扇を立てた海戰の話、一の谷に日の丸の扇の要から射落した那須與市宗高の話、信長は豊太閤が征韓に用ひた船を日本丸と命名して日章を附したり、徳川家康も家光も戰陣や軍艦に日章を用ひたことなど數へ立てると何々賑やかな歴史の頁が繰りひろげられそうです。

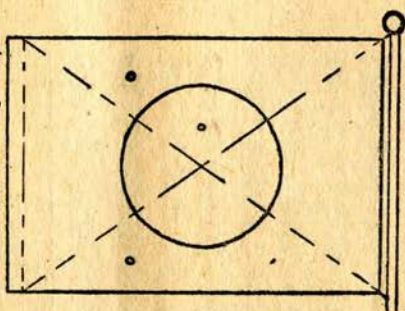
安政元年七月十一日、親令を以て日の丸がお國の總印となるまでは仲々の経緯が續達されて居ります。此の七月十一日といふ聖期的

な日から僅か二ヶ月間の五月、幕府は一體どんな心境にあつたかといふと、前年の九月水戸烈公の議を採擧し、大きな船を造つてはならぬといふ從來の禁制を解いて多年に亘る鎖國政策から百八十度の轉換を餘儀なく

せられて見ると、寧ろ四圍の情勢から考えて積極的に外國との交易を容認しなければなりません。早速に必要なものは船印であり國旗であつたのです。然し何うしたらよいか幕府には全く定見がなかつた所へ十一月には島津家から一足先に『船は追々普通より大きいのを造ります』が外國船と紛れないやうに白帆毎に朱の日の丸をつけたと思ふが宜しいか』と伺ひ出たのであります。當時これに對して幕府は宜しいとも宜しくないとも返答しかねて『伺ひの通りでよからうと思ふが、帆印は御國の總印取極めてから後で知らせることにしよう』といふ返事で實にしどろもどろだつたのです。何故しどろもどろだつたかといひます

第二圖

太政官布告第六百五十一號



比率 旗三 竿二 日赤の太さ 餘幅流の寸分 明治三年三月五日

と幕府としては全國の總帆印には中黒といつて日の字を模倣化した黒い紋章を用ひさせ幕府の旗として日の丸を用ひ度かつたのです。斯る心境は勘定奉行再度の船章會議にかゝ

はらず『全國の總帆印には中黒、船印には白布紺布吹貫を立て、幕府の旗は日の丸を用ふべし』といふ布令に落つたのであります。時幕未衰微を兆したとはいへ、幕臣の認識が權勢の下如何に迷亂錯倒してゐたかが想像せられるのであります。

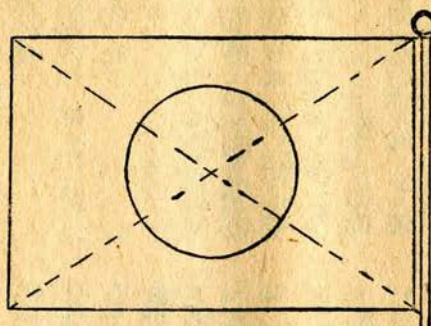
齊彬公は日章旗の雛形調製に苦心没頭し、縦三尺位、横四尺位、或は白木織、或は白の帯書織を用ひ、日の丸も明るい紅や朱で廳はし改假又改假、遂に四回目には白羽二重白緞面に日の丸も前よりは大きく拵へ苦心の作品大小四種を白木の箱に入れて、當時此問題に關しては騎旋の主役を承はつてゐた關老阿部伊勢守正弘に差出したのであります。兎角するうちに外國との交渉も益々頻繁となり一日も早く總印を極める必要に迫られてゐたのですが阿部正弘は黒の日の丸が自分の紋であるのに夫れを赤い日の丸に直してお國の總印にするのは心苦しいと妙な所で遠慮してしまつて話が進まなかつたのであります。そこで島津公は『夫れは公私混同といふものだ私事の感情で天下の公事を措くとは以ての外だ』と説得これ努めた結果『然らば』といふわけで翌日直ちに幕府の指令となつたのであります。

併て現在する唯一の國旗に關する法令は明治三年正月二十七日の太政官布告第五十七號

郵船商船規則の別冊『御國旗の事』に定められ、これとは別に『海軍御國旗』の制定が同じ年の十月三日に太政官布告第六百五十一號として公布されてゐます。これを掲り易く、旗のを一月法令、後のを十月法令と代稱してお話を進めます。

セオ三圖

松波博士考案ノ國旗



比横三 比縦二 日章 日章 日章
日章の位置 旗面中央

國旗の制式は殆ど亂雑を極めて居りますが法令に根據のあるのは一月法令の國旗で大中小三通りの寸法を示してあり、其比率は横の一〇に對して堅七の割合、日章の直徑は縦の五

分ノ三でその位置は旗竿の方に旗れの百分の二だけ片寄つてゐます。それから民間で一般に用ゐられてゐる國旗は十月法令に根據してゐるやうに考へ違ひをしてゐる人も

あるやうですが、十月法令による制式は横三に對して堅二の割合で、日章の直徑は一月法令と同じく堅の五分ノ三でその位置は中央でなくて旗れの二十分ノ一だけ旗竿の方に片寄つてゐます。従つて今一般に個人の家庭に用ゐられてゐる横三堅二日章、堅五分ノ三日章、旗面中央の國旗は何れの法令にも根據のないもので政府が新しく法令を以て規定しない限り決して『正しい國旗』ではありません。この新案國旗を考へ出した人は此方の研究で有名な法學博士松波仁一郎先生です。松波博士はこれが正しい國旗だといふことを明治三十三年以來四十餘年今も尙熱心に提唱してその法令化に努力して居られますが一寸見込みがありません。従つ

てまだ正しい國旗といふには早過ぎるばかりでなく、或は事によると國旗を僭稱したことになるかも知れません。文部省なども一時は松波博士提唱の國旗を正しいものとして小學校の教科書に取入れてはゐますが、これは國教勸育獎勵會が松波博士の説に聽從して文部省を動かしたもので絶對的なものではありません。この外東京市や愛國婦人會などが特に堅の三分ノ二の日章を用ひたりしてゐるのは全く新案以上のもので強いて根據を求めらば海軍の艦首旗が五分ノ三から三分ノ二に改められ日の丸を一層大きくした歴史はありますが、これは遠方から見方が多い關係からさうしたのではないかと思はれます。或る地方では四角な國旗が一番作りやすくて便利だといふので風呂敷型のもを作つてゐるさうですが、斯うなると一層何とか一定しなければと考へられるのであります。各地の識者が文部省あたりに頻りに問合せを行ひ、どれが一體本當の國旗かはつきりさして貰ひたいといふ要求が出て來たのも無理からぬことで

あります。

そこで文部省は昭和五年濱口内閣のとき國旗に關する俄として内閣に照會を發することになり、これに對し内閣は直ちに次のやうな回答を與へました。

内閣文庫第二〇號

昭和五年十二月十五日

内閣書記官長 鈴木富士彌

文部次官 中川健藏 殿

國旗ニ關スル件

本年六月九日地文一〇號ヲ以テ標記ノ件御照會ノ次第有之候處國旗ノ制式及掲揚方法等ニ關シテハ從來一般の準則ヲ缺キ從ツテ自ラ區々ニ涉リ將來何等カ準則制定ノ要ヲ被認候へ共差當リテハ明治三年太政官布告第五十七號、大正元年閣令第一號ニ則リ且ツ舊來ノ慣行ニ鑑ミ大體左記要綱ニ依ルヲ妥當ノ如ク思料セラレ候條御了承構成度此段不取敢及回答候

記

國旗ノ制式(抜表)

一、國旗縱横ノ比率及形章ノ直徑比率並ニ其ノ旗色ニ於ケル位置ハ、祝意ノ場合タルト

再意ノ場合タルトヲ問ハズ何レモ明治三年太政官布告第五十七號ニ定ムル國旗制式ノ

比率ニ準據スルヲ妥當トスベシ

これに依つて諸官廳は勿論郵船商船其他公けの團體では從來も一月法令による十對七比率の國旗を掲げてゐたのですが、これより一層標準の規格がはつきりとして來たのであります。然し今まで松波博士の國旗制式を正しいものと一途に信じつた多くの方から異議百出し、一方では法令に根據ある十對七比率の國旗を主張する等、容易に議論が納まらな

いので昭和十三年、島津忠忠公爵を會長とする日本國旗會なるものを設け、副會長には松波博士が推され、阿部信行大將を調査委員長として此方面の熱心家川村鑑太郎伯爵其外權威ある人達が鋭意調査の歩を進め、同年十一月一日以來本年六月十七

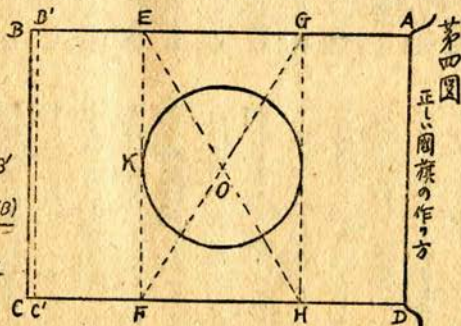
日迄十回に亘つて會合繼續を重ねて來たのであります。

大勢は松波博士の主張に引摺られてゐる形で調査報告書も出來上つたにかゝらず、オ

イ、その決議一寸待つた」と出たのが川村鑑太郎伯爵です。川村伯爵の主張によると、如何なる法令が後から出て

も前の法令に抵觸しない限りその法令は有効であることは憲法第七十六條によつて明かに保障されてゐる。一

月法令の國旗は何等十月法令に依つて改正の影響を受けてゐない。殊に一月法令に依る國旗の日の丸が百分の二だけ旗竿の方に寄せて



$$\begin{aligned} AD &= AE \\ &= DF \\ &= EF \\ BC &= BG \\ &= GH \\ &= CH \\ AG &= EB \\ BG &= \\ \frac{2(AG + BG)}{100} \\ OK &= \frac{1}{2} AD \times \frac{1}{2} \end{aligned}$$

あるのは最も先人苦心の存する所であつて、日章を若し旗面の中央に置くが如きは旭日の意味を失ひ實際に擧げた時、日の丸が退つて見えるからどうしても風下に餘幅を置いた一月法令の國旗はどちらから論じても改める必要なく且つ今に存在する法令を無視するは教育勅語の「國憲ヲ重シ國法ニ遵フ」の御聖旨に反する不逞思想であり駁じて看過するわけにゆかぬ。又、明治二十三年法律第八十號も何ら國旗の條項に抵牾してゐない。松波博士の考案になる國旗は法令として根據なきのみならず、實際擧揚の場合發刺たる生氣の躍動を缺く不完全な國旗であるから、斯んな制式の國旗は認容し難いものである……といふのが彼の意見の骨子です。

私は鹿兒島にある頃國旗保聖運動を提唱し知事に建議書を出したり、護れ日の丸といふパンフレットを六千部種々方面に配布したり或は日の丸講演會を學校から頼まれたりなどして相當保聖の目的を達したのでありますが一昨年三月やはり國旗問題のことで東上し、

松波博士を訪ひ津崎代議士の紹介で大久保利武侯にもお目にかゝりました。その後川村俊から電話で五月二日華族會館で天皇旗に關する講演があるから是非来ないかとのお話でした、それが結構で六歳ほどお會ひして國旗の事に就ては最近の情勢なり、又川村俊の意見は隔から隔まで知ることができ、種々な參考資料も見せて頂き大分國旗に關する知識を豊かにすることができました。こんな點で私としては川村俊の意見も松波博士の主張も明瞭に浮び上つて來ましたが、今後の動向は川村俊の投じた一石によつて意外に大きな波紋をよび起すのではないかと考へられます。從來松波博士の述べられたものだけを資料として所謂正しい國旗を提唱して來た立場を私としても一應白紙に還元して仔細に検討してみると何うも内閣の支持する即ち川村俊の力説せられる十對七の比率による方が妥當の域から一步進めて當然といふことになりはしないかと豫想してゐます。

この十對七比率の國旗を作る場合大へん困

倒のやうに見えますが第四圖のやうにして圓の中に入れると簡単にできます。即ち長方形 ABCD の中から二つの正方形をとり出す。即ち一つは A E F D、もう一つは B' G H O' です。此時圓 O は第一の正方形の一辺 E F に接し、第二の正方形の一辺 G H にも接します。圓の大きさは A D の五分ノ三を直徑としますから布幅の五分の三といふことは何うしても計算しなければなりません。乳明 A G と先明 E B は A B を一丈とすれば B' 即ち二寸だけ先明の方が長くなります。これが餘幅であります。圓の中心を求めるとは斜角線 G F と E H の交點 O となり E F と圓の接點を K とすれば O K は日章の半徑となつて萬事これで O K といふわけです。まだ國旗に關する獨得な説明法も發見してゐますけれども紙數の關係もありこゝには割愛して他日の機會に譲ることにしませう。終りに明治天皇の御親一、明治三十八年の御詔出「旗」と御遊ばされてくもりなき朝日の旗にあまてらす

神のみいづをあふげ國民



話童

め

だ

か

濱野義光

憲ちゃんの小學校は、村の端れの小高い丘の上に、高くそびへて居る二本松と並んで、遠くから見ると、まるでマツチ箱の様に、お行儀よく、チョコンと建つて居ました。

學校の教場の隣に、二本松の原つば、と呼ばれて居る、野原が緑の草を一面に敷いて、廣がつて居ます。此の二本松の原つばは、憲ちゃん達の一番の遊び場です。

陣取りや、鬼ごつこや、角力をするのは、みんな、この原つばなのです。

柔い土は、子供の裸足の裏に、氣持ちよい、感觸を與へます。

『ねえ、みんな、明日の遠足、素敵だなあ』
つて三ちゃんが、大きな聲で叫びました。
『そうだと、僕達の遠足だ。三高山のつて、

べんへ、登るんだぞ』

竹ちゃんも、負けない様な大きな聲で云ひました。

憲ちゃんは先つきから皆なと一緒に、此の二本松の原つばで、遠足の相談をしようて、誘ひ合せて來て居るのです。

『僕、うんと、お弁当を持って行くんだ、それから、はだし足袋も、はいて行くんだぞ、それから、夏蜜柑も持つて、それから……』

大きな聲で、盛んに、威張る様に、向きになつてどなりました。

『解つたよ。解つたよ。憲ちゃん、はだし足袋はけるつて、嬉しんだろー』

三ちゃん、憲ちゃんにどなりました。
『ワッハッハハ……』

あんまり三ちゃんの聲が、頓與なので、みんな大聲で笑ひました。

『嬉しいさ、嬉しいよ、嬉しくない奴なんて、あるもんかい』

妙な調子をつけて、憲ちゃんも、負けずに、云ひました。また一同はワイ／＼／＼喧かましい位、大さわぎに、はしやぎました。

『ちやね明日早く集まるんだよ。遅れると、先生に叱れるよ、僕あ一番だ、ちあ、さよなら、あばよ』

三ちゃんは一人でしやべると、丘の向ふへかけ出して行きました。

『僕が一番だッ』

『僕だ、い／＼ッ』

憲ちゃんも負けずに叫びました。そして、ワ／＼と興の聲を上げ乍ら子供達は、丘を駆け上り、かけ下りました。

夕日を浴びて、丘の二本松は長く、影を、原つばへ撮つて居りました。

憲ちゃんは、夢中になつて家へ歸つて來ました。

「唯ッ、遠足ですッ」

つて云ひました。憲ちゃんも奥に、お父さんが居るのに、気が付くと、あわてゝ、

「唯ッ、歸りました」

つて、御挨拶の云ひ直しをしました。

「何、遠足か、あゝ、明日は憲坊の遠足か、いゝなあ」

「お父さんも奥から元氣で、ニコ／＼作ら出てこられました。」

「うん、僕の遠足だよ。其してお辨當は、特別大きい、日の丸辨當を作つて下さいね」

「よし／＼、特別上等を作つてやるかな」

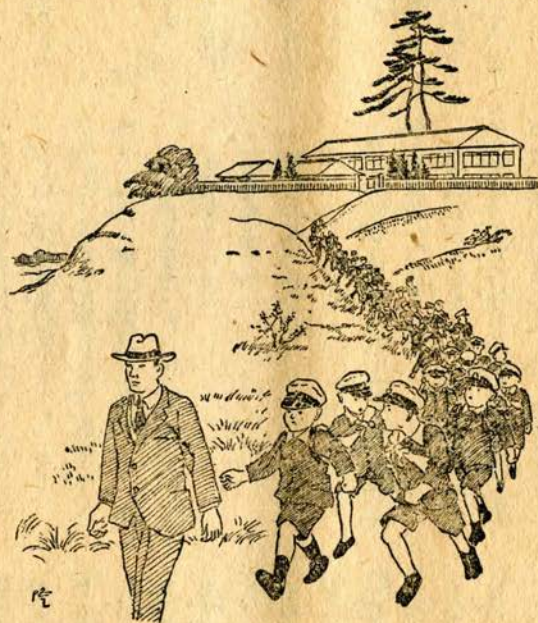
「其れから大きい夏蜜柑もねえ」

「あゝ、よし／＼、憲坊のは、みんな特別上等だなあ——、ワッハハハハ、」

お父さんは太い聲で笑ひました。憲ちゃんも嬉し相な顔で、お父さんの笑ひ顔を眺めて

居ました。

いよ／＼今日は遠足の日です。朝から、強い初夏の太陽に、校のお山も、田圃も、小川



「お早う」

「お早うッ」

「いゝ天氣だなあ」

「まぶしいなあ」

「学校の屋根が、あんなに光つてらあ」

三ちゃんが、云ひますので、みんなが、学校の教室の屋根を見ると、朝日で、反射して瓦が、びか／＼光つて居ました。

憲ちゃんも自慢の、特別大きい日の丸辨當を、背負つて集つて來ました。

「憲ちゃん、遅いなア」

三ちゃんと竹ちゃんが一緒に聲をそろへて云ひました。

「だつて……僕、お辨當がとても、重いんだもの」

つて云ひました。それを聞いて、みんなどつと、大聲に笑ひました。

やがて、學校から、カラン／＼／＼つて、いつもより、元氣よく、鐘が響いて來ました。

どや／＼と子供達は、學校の庭へ集りました。

いつもの様に、きれいに整列しました。組長さんが、元氣よく號令をかけるのと、

『一、二、三、四ツ、五ツ』

つと各組の生徒達は、大きい聲で、番號を云ひました。

終つて、正面の一番高い所へ校長先生がお立ちになりました。

『最敬禮ッ』

先生の號令で、宮城通拜を致しました。君が代も、終りますと、校長先生は、みんなに向つて色々御注意をなさいました。

『……それでは、是から、遠足に出掛けます。が途中列を離れないやうに充分氣をつけて下さい』

御注意が終りました。それから、皆んな、各組々で組旗を先頭に元氣よく、田圃道を、通つて、野原を横切つて、國道を歩いて、三高山へ行きました。

お天氣も好いし、風もなく、初夏の新しい、空氣を吸つて、子供達はとても、元氣よく山登りをしました。憲ちゃんや、三ちゃん達の

組は一番元氣よく、一番張切つて、いつも、先頭でした。陣取りも、一番をとりました。

その上、おいしい、お弁当を喰べて、思ひ切り飛び廻りました。雲雀の様に歌ひ、鬼の様に跳ねまわりました。

楽しい一日の遠足が終りました。そして、子供達は、みんな元氣よく軍歌を歌ひ乍ら、歸りの國道を歩いて戻りました。

『國を出てから
幾月ぞ
お前たよりに
乗切つた
……………』

愛馬進軍歌を元氣よく、みんな聲を揃へて歌ひ乍ら歩いて居ました。

大分あるいたのと、うんと飛び廻つたので、子供達も、相當つかれたのでせう。列が少しづつ、開いて來ました。

『列をあけない様にし、列を正しく、歩くやうに』

先生は大きい聲で、御注意なさいました。

その時、憲ちゃんは、うつかりして居たので、自分の前の三ちゃん達と、五六米程、間が、あいて仕舞ひました。あわてゝ、憲ちゃんが駆け出しました。其の時、憲ちゃんは、駆け出し乍ら、後を見ました。其の爲めに、遂に、フラ／＼と列をはづれて横へ出て仕舞ひました。

其の時です。前方から國道を馳つて來た、乗合バスが破煙りを上げて、憲ちゃん達の列とすれ違つたのですが、其のあふりを喰つて、アツ／＼と云ふ間に憲ちゃんの身體が横にのめりました。

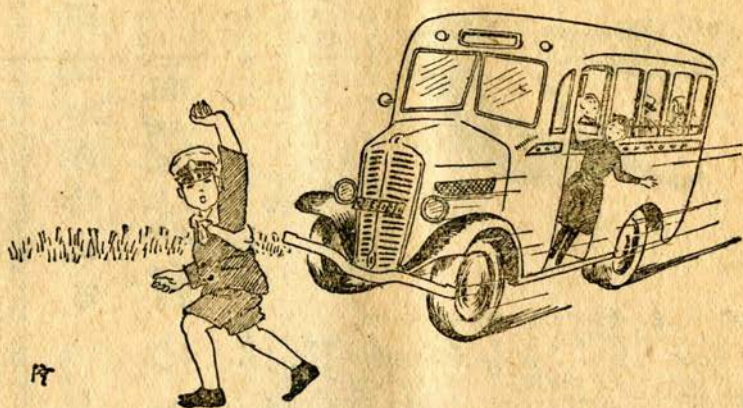
『あぶないッ』

『憲ちゃんがッ』

つて大勢が、馳けつけて來ました。三ちゃんや、ワ／＼と大きな聲で驚きの餘り、泣き出しました。

それから大分経つたのでせう。憲ちゃんがふと目を開けて見ると、あたりは妙に變つた小さいお部屋に、自分が寝かされて居るのに、氣がつかしました。足や、腰が、何んだか、變

に、怖い様な気がします。しばらく、あたりを、見廻して見て、始めて、憲ちゃんも自分



序

が、自動車に、はね飛ばされて、學校の宿直室で、看護されて寝かされて居るのに気がつきました。お部屋には誰も居りません。寝りぼちです、憲ちゃんは急に淋しい様な、悲しい様な、済まない様な氣持で一ぱいです。其次には頭の中で『叱られる』

と考へました。お父さんの顔、先生の顔、友達達の顔が順々に、大きく、天井に撮つて居る様な気がしました。思はず憲ちゃんは、

『お免なさいッ』

つて、吾れ知らず、叫びました。

先生や、お父さんが、聲に驚いて、次の室からどや／＼とお出になりました。

『憲司君大丈夫かい。』

先生がやさしく、聲をかけられました。

『憲司、氣がついたか』

『お父さんが、しづかに顔をのぞき込んで聞はれました。』

憲ちゃんは初めて、自分が、みんなから叱

られなかつた事に、氣がつくと、急に、嬉しい様な、悲しい様な氣持ちが、ごつちやになつて、いきなりまた、泣き出しました。

先生やお父さんも、憲ちゃんが、大した傷ぢや、なかつた事を喜んで、返つてお叱りにならなかつたのです。

宿直室の、憲ちゃんの寝て居る枕もとに金魚鉢が置いてありました。きれいなガラスの鉢の中の藻の間を、めだかが七八匹、スー、スーと泳いで居ます。先きのめだかの後から、二番の、めだかが、また後に三番目の、めだかと順に行儀よく、卵を作つて一卵に、鉢の中を輪を畫いて、泳いで居ました。

憲ちゃんは、泣き止んで、じつと其のあり様を眺めて居りましたが、行儀のいゝ、めだかを見ると、自分が何んだかは、づかしくなりまして、くるりと廻返りをしました。

お窓の方を向き直りました。

夏の白い雲がふはりと滲れて居ます。

『めだか、なんかに負けるもんか』

憲ちゃんは、そう小さい聲で言ひました。

七月の佛行事

印度から始まる

孟蘭盆會の由來

孟蘭盆會は年に一度祖先の靈を自分の家にお迎へして供養するといふ結構な行事で、年々旺んになつて來ましたが、これは古く印度

にもあり、その後色々に移り變つて今日に至つたものであります。

印度では古來繼嗣がない内に死ぬと地獄に行くといはれてゐたので、佛弟子が出家してしまふと妻子を持たないために、その親は地獄に行くと考えられてゐました。

そこで別の方法で親を供養せねば不孝ものになりますので、孟蘭盆會で祖先を供養したといはれてゐます。

しかし經文には、目連尊者がお母さんを餓鬼から救ふために、お

釋迦さまにお願ひして、十方の大德衆僧に供養すべきことを教へられ、お母さんを餓鬼から救つたといふのが孟蘭盆會の始まりとされてゐます。支那にこれが傳はつてからは一層盛んになり初唐時代には廣く官民の間に擴まりました。支那は古くから祖先を祭りに孝をなすことを尊ぶ國ですから當然

のこととせう。わが國では齊明天皇の三年に初めて孟蘭盆會が行はれました。爾來ますますこの行事が旺んになりました。各家々でお聖靈棚に、枝豆、瓜、茄子、蓮根等の新鮮な野菜を供へ、お寺の坊さんに棚經をあげて貰ひます。

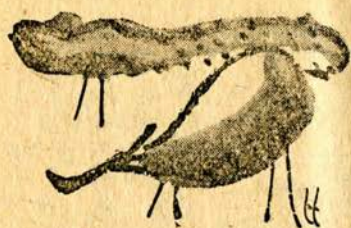
施餓鬼會の供養

施餓鬼會は地獄に墮して飢餓に苦しめられてゐるものに供養する法會であります。

に食物を施すやうに諸比丘に命じたといふ話があります。又他の説に、佛が阿難にお説きになつて、陀羅尼を誦して食を施し以て餓鬼に食を與へるやうにしたといふのがあります。

その由來は經典に幾つかの説をあげてゐます。その一つに、人の血肉を常食としてゐた鬼がゐて、この鬼が佛法に歸依したために殺生が出來なくなりました。そこで佛がこの鬼と鬼の眷屬のために常

これを要するに、施餓鬼は如來の大慈の施説によるものであつて、一般に亡靈供養のためにする



ものであります。そしてこの法會によつて施食をいたしますと、一ぱいの食物が變じて無量の飲食となり、そのおかげを以て一切の餓鬼等が食を得て苦を免れるとされ

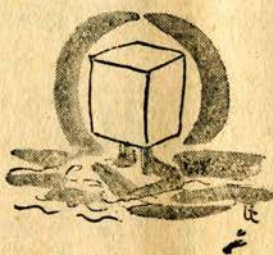
川施餓鬼

川の中に舟を浮べて、施餓鬼會を營むところから川施餓鬼と云ひますが、これは水死した人や魚類の供養を行ふものです。船を川の上下に操りながら、精靈の戒名を書いた塔婆を流して同向します。

川施餓鬼の由來は流灌頂といつて、わが國獨特のもので、幡を水に流して無縁の亡者に同向することから始つたものです。流灌頂には幡ばかりでなく、佛名や佛堂を書いた紙片、塔婆等を流す地藏流し、塔婆流し等もあります。

てゐます。

わが國では弘法大師が初めて傳へたといはれてゐますが、今では各宗ともに大體同じやうな作法によつて施餓鬼會を營んでゐます。



燈籠流

盂蘭盆會が終つて、精靈を流すことを燈籠流しといひますが、盆燈籠を流すこともありま。麥藥で船を作つて、それに供養の團子や菓物をのせ、灯をつけて流すも

のです。夏の川邊でユラ／＼ゆれながら靜かに流れてゆく精靈船は

俳句からみた

七月のいろ／＼

七月を「ふつき」又は「ふみつき」といひます。文書ひらく月、文書

ひるげ月の意味だと云ひます。

七月はお盆の月で、各家々では

迎へ火や送り火をたき、祖先を祭

る楽しい行事があります。古い俳句にも、

棚經や聲の高きは弟子坊主

(其角)

迎火や風に折戸のひとり開く

(蓼太)

送火やかくて淋しき草の宿

(虚子)

等があります。

お盆行事にふさはしく美しいものです。

靜かなるこの山蔭や墓まうで

(虚子)

何んな人でもお盆には墓詣りを

します。一體にこの月は佛さまの

月のやうに思はれます。

蓮の葉になんむ／＼といふ子か

(一茶)

亡き人の小袖も今や土用干

(芭蕉)

土用干は華やかなものでありな

がら、色々と思ひ出の種ともなり

ます、土用に入ると暑さも急に厳

しくなります。

あみ笠に蟬の音重し日のさかり

(梅軒)

夕顔の花にさめたる暑さかな

(子規)

會員通信

居士林より

天津 山田昇禪

と思はる。

支那寺は佛教居士林といふ。嚴密に言へば清修禪院佛教居士林といふ。華滿全般の主要都市に現存するといふ居士林は淨土教を中心とする信者の集團で當市では華街東南城角に在り林長には北支政界の巨頭前總理靳雲鵬居士を戴き男女居士約六百を有する當地での中華佛教の根本道場である。

「長髮賊の亂が極端に破佛的であつたのと光緒帝の末年からは寺院の財産を沒收して學校講習所兵營等に用ひたので佛光地に墜つ状態であつた。」といふ通り當地に於ても華街の小學校は凡んが寺院を改造し堂宇は教室となり境内は校庭と化したものである事を目撃する。近々百年來の出來事である。

宗祖を鑽仰し

名古屋 川口龍石

こゝの常在僧は十餘名。山西省五台山の法師達である。本尊は阿彌陀佛、左右に觀音勢至を安置し佛前壇上の空間に〇の中に佛と赤

のネオンすえて我身を焼く。灸の跡があれば一人前であるといふ。食事は絶體精進で白米飯は一週一度、殆んどが粟飯と粟雜炊とマ

〇知恩院圓光明照大師を仰ぎて圓やかに光照り添ふ華の山明きみのりの恩ぞ知らるる

うつし世を明るく照らす日のみかげまどかの光うくる嬉しさかなしみにかつては濡れし我が袖もうれしきつゝむ衣なりけり

〇二河白道の御法を喜びて青き潤赤き炎のおかすともまひを點じる所など如何にも支那らしい。

持戒堅固なる事は僧俗共に一黨に値する。彼等は受戒すると僧は頭上に、居士は腕にそれぞれ灸を

ントウと色糺せた菜の煮たもの一椀である。調味は極少量の醬油以外には望んでも得られない。辛じて一日三度頂ける事が何るよりの樂しみである。

かにそのめの色のゆかりの懸にだに

あふには身をおしみやはす

生死得脱としての願生、本願念佛の行者の姿は正にかくあるべき



世界で一番御し難いとされてゐる支那の婦人が女居士になると五體投地しては終日稱念し持戒清淨に日を送つて居るのを目撃すると

奇異の觀に衝突される。法堂に溢れる老若男女が楞嚴經や金剛經等の講經を聴聞し念佛行道する姿は現今内地の寺院では珍らしいものではあるまいか、更に功德堂に奉安される中日戰没勇士の英靈牌の前で朝暮追善の念經を爲し東亜和平を祈念しつゝある我等日華僧侶は死生共に同願念佛の實踐であると自負してゐる。

夏の木炭自動車 山崎善一
運轉手「少し涼しくしてやらなくちやお客さんに氣の毒だアヨ」

このたび生死をはなるゝみち。淨土に生るゝにすぎたるはなし。淨土にむまるゝをこなひ念佛にすぎたるはなし。念佛の興行は愚老一期の勸化なりされば念

佛を修せんところは、實踐を論ぜず。海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なり。

我大師釋尊は法然上人也と讃仰された二祖上人の信仰態度こそ今の私の求法の姿であると信ずる時宗祖の御心は温かく我が心を包む唯ひとり支那寺の一隅に拜讀する宗祖の御法語、御傳記の一々は身にしみて有難く感じられる。殊に建永二年三月十六日讀取御遺蹟花洛を發たる一條り月輪殿下との訣別の條り等は涙千行止まるを知らぬ。

露の身はこゝかしこにてきえぬとも心はおなし花のうてなそ御返歌に接した關白殿下のその年の春も送らず四月五日薨去あつた事を想へばこの歌の深い味が有難く感じられる。心は同じといふ所で病床の殿下はキツト落涙感激の

稱名を唱へられたであらうと拜される。愚詠二首、
靜なる想ひ
○旅に病みて今宵はひとをしみに
みと戀ひつゝひとり窓の月見る
○栗飯の夕餉終りて出しとき紫陽
花の花に雨は降り居り

淨き友 信仰座談會案

内 (七月例會)

一、日時 七月廿一日午後四時 (第三日曜)

一、會場 東京市本郷區東片町七八橋本榮榮宅 (電小石川四九七六)

一、講話 一紙小消息講義 (完) 中村辨康先生

本月は特に一同とし、中村先生の講話を終つて、會員の體験につきゆくり座談いたしたいと思ひます (なほ粗餐を用意します)

淨き友の會幹事

信 仰 相 談



擔 當

中 村 辨 康

質 問 歡 迎



亡き父の今頃及びその冥福は

問

小生の父は至つて健康で多忙の月日を送つて居ましたが、一月程前

急逝致しました。その臨終は私達の目を覆

はせるものがあり、その苦惱の有様は私達をこの上もなく悲しませました。平生は信

仰もあつたやうに思ひますが、御念佛一つ

申す間もない内に事切れてしまひました。

子としての私は何うぞしてこの不幸な父の冥福を祈りたいと思ひますが、何うしたら宜しいでせう。また父は今頃何うなつて居

るでせう。何卒御教へ下さいまし。

答

それは寧ろ悲しいことでせう。御同情申し上げます。一月程前と云

(仙臺・青木五生)

ふ御話から見れば、まだ御中陰と存じます。お父様の御信仰が何れ程のものであつた

か、御手紙にはその邊のことが委し言はれ

てありませんので、その死後が何うなつて居

るか判定に苦しみますが、若し本當に如來様

の本願を信じ心から如來様に南無し得て居た

とすれば、たとへ臨終に苦しみに閉ざされて

お念佛が出なかつたとしても、屹度如來様の

來迎に預かり淨土に御往生して居られることを信じて疑ひません。然し上人も「人の死の縁はかねて思ふにかなひ候はず、俄かに大路にて終ることも候ふ、また大小便利の所にて死ぬる人も候ふ。前業のがれ難くして、太刀かたなにて命を失ひ、火にやけ水に溺れて命を亡ぼすたぐひ多く候へば、さやうに死に候とも、日頃念佛申して極樂へまいる心だに候ふ人ならば、息の絶えん時に阿彌陀觀音勢至來り迎へ給ふべしと信じおぼしめすべきにて候なり」とか、また「臨終思ふやうならずとも念佛さへ申さば往生すべし」とか申されて居ますやうに、臨終に苦しみに攻められて死なれても、外見だけで批辨は出來ないと思ひます。たとへ息は絶えてもまだ心の働きや感覺は残つて居りますから、息が絶えて後、からだが動かなくなつたのち、如來の來迎を拜んで正念に如來の御名を呼んだかも知れず、日頃の信仰に依つて、からだの苦痛がとれた時、心で如來様をお呼びした筈であり、また如來様は大慈悲を以て御來迎し



談相仰信

て下さつた筈でありますから往生の目的を達して居られることも存じます。

また假りに平生の御信仰が本ものでなかつたとしますと、それは無論今までの業にひかれる譯ですから、やはり六道輪廻を續けなくてはなりません。六道の内の何れに決定するかは平生の精神的傾向の如何に依るわけですが、一週間乃至七週間それが決定されると申すことです。子としてはその間に出来るだけの冥福を祈る義務と責任とがあると思ひます。そしてその冥福を祈る方法はと云へば、聖道門的に云へばあなた御自身が、布施持戒等の六波羅蜜とか讃誦聖典、起立塔像とかを行つてそれをお父様の靈に回向するにあるのですが、それは身に契ふ程度しか出来ませんし、誰にでも出来る譯には行きません。

それですから誰にでも出来る浄土門の念佛に依るより外に方法はあります。先づ第一にあなた御自身が念佛の

信仰にはいる必要があります。御自分の信仰に依る至誠心を以て如來様にお父様の冥福増進をお願ひするのが最もよろしいことです。然し急に信仰にはいらうと思つたとて、さう思ふやうに行くものではありませんから、どなたかに教へを受けて心を整理し、また御自身でも努めて念佛して如來様に信心確

信仰と戀との矛盾

問

小生の家は祖父の代より信仰篤き家庭に御座候が、小生も祖父及び兩親に感化され今日まで念佛の中に落ちついた日々を送り來り候。然る處近頃或る一女性に心引かるゝやうになり、自分で自分を制御し得ざる有様にて自分ながら困り果て申し居り候。かゝる事を申し上げるは誠にお恥かしき次第に御座候へ共、實はその女性は兩親の氣に入らず、爲に到底結婚を許し呉れやうとも思はれず、今日此

定を御願ひするやう心掛けて下さい。一人出家すれば九族天に生ずと申します。出家の有無ではありません。あなたが信仰に入つたことに依つて出家以上の利益功德があなたを取りまく過去現在未來の大勢の人々を幸福に導くでせう。

頃の小生は念佛どころでなく、たとへばま雨の後にすはつて佛壇の前で御念佛することありても、全く上の空にて、その女性の顔のみ思ひ出され、二人の結婚を如何に實現すべきかの問題が一杯にこんがらがり如何とも致しがたく候。然し心のどこかに於てはシツカリした信仰を獲たく本氣のお念佛も申したく候。如何致して宜しきや、御多忙中恐縮ながら御示教の程幾重にも御願ひ申上候。



説相信

(静岡・志太・猪生)

== 答 ==

あなたの求
道心が異性との問題で明朗をかい
て現に煩悶して居られ

る有機が御手紙で目にみるやうによく判ります。御本心では一心に道を求めやうとして居られても、人間としての本能的な心がそれをさまたげ、信仰を得やうとする心を微弱なものにさせて居るわけですね。

それにしても、道を求むる心を忘れないあなたは近頃の青年に似合はず、誠に見上げた方だとほゝえましくも思ひます。

若いあなたに取つて一異性への思慕が全く絶對的と云つてもよい程、あなたの心を縛り付けて居ることは、人間本来の煩惱の然らしむるところであつて、女の髪は太象をもつたぐと云はれる程力強いものになつて居るのでせう。實に恐ろしいものは異性への戀です。これが爲には命を捨ててさへあります。然しながらそれも若い間の事であり、結婚以前の

ことであつて、望みがかなつて結婚し、三年五年七年と過ぎると、お互の缺點ばかりが目について、死をも辭せかねなかつた、あれ程の思慕心も夢のやうには、かく消え、時々夫婦喧嘩も行はれ、にくみ合ふことさへ生じて來ます。人に依つて無説相違はありませうが、現實と夢とは大變な距りのあるものです。また女に従ふか、兩親に従ふかも大問題です。小説の題材によくありますね。若しその女がほんとによい人であるならば、あなたの御兩親もあなたの幸福の爲に、何時かは説解して呉れるでせう。子供の幸福を念願しない親は一人もないからです。

御手紙に依ると、その人はあなたの御兩親の氣に入らないやうですが、何か其處に特別な事情がありはしませんか。若いあなたの見ると御兩親が御兩親共二人揃つて「あれは粹の嫁にしたくない」と見て居る眼との相違が、若し常識的に誰がきいても親の言分が「是」であるとするものならば、あなたの眼の方が年の若いだけに感觸がないだけに間違

つて居ると言はねばなりません。それならあなたももう一度よく考へて見る必要があると思ひます。

但し人の縁と云ふものはさう簡單なものではありません。結局なるやうにしかならないと存じます。ですから充分人力を盡して事をはこばれたらよいでせう。あなた御自身でよく御兩親を説得するとか、或は誰れか近親や先輩に御相談なさるとか、一人でクヨクヨなさらずにグングン積極的に事を運ばれては如何ですか。さうして色々と人力を盡して見ても成功しなかつたら、その時はその時でまた轉換の道を開いたら如何です。

私はあなたの御家庭の事情も知らず、その方の事も知りませんから、何とも申し上げやうありませんが、唯だあなたの御實ねの念佛の問題に對しては、次ぎのやうにハッキリ申し上げる事が出來ます。

一、どんなにあなたの心が錯亂して女のことや頭が一杯になつて居ても、念佛を忘れてはいけません。むしろ却つて如來様に御指



に示を仰ぐやうしなさるがよいと思ひます。

二、如來様に一切を御委せなさい。無論具體的には人力を盡して事を運ぶべきですが、それにしても一心に如來様に、我をばらず適當に道を開いて下さるやう念佛を通うして御願ひなさいまし。

三、凡ては念佛中心にして下さい。法然上人も「現世をすぐべきやうは念佛の申さるゝやうに過ぐべし。念佛のさまたげとなるべきは何なりとも萬事をすてゝ之れを止むべし。一人にて申されずば妻を娶りて申すべし云云」と云はれて居り、また「かりそめの色のゆかりの戀にだに逢ふには身をおしみやはする」と云ふお歌のやうに、異性への戀心を知るにつけても如來欣慰の心を深くせよと勸めて居られます。願くば五十年の命を棒にふらずに永遠の無量壽の中に生きるやう心掛けて下さい。

何故にお釋迦さまを第一にしないか

問

いさゝか愚問かも知れませんが、基督教では十字架のイエスキリストを此上もなく尊み禮拜して居ります。然るに佛教ではお釋迦様をそれ程禮拜しないやうに思はれますが如何でせうか。お寺に御詣りして見ますにお釋迦様のお姿が見えません。よしあつても片隅に置かれて居ます。基督教のそれと較べて餘りに相違して居るやうです。これには何か理由があるものでせうか。お教へ下さい。

(埼玉・岩田)

答

佛教各宗を通じて決してお釋迦様を粗末にしては居りません。教へ

主として尊嵩して居ります。淨土宗などでも「五重相敬」の時など、既に阿彌陀佛、更にお釋迦様をおまつりして、發願の教主釋迦牟尼佛、來迎の教主阿彌陀佛の二尊照鑑の下に儀式を行つて居ります。

然しながら宗旨に依りまして「本尊」が違ふことは事實です。大體に於て淨土宗や西山派や眞宗や時宗等は阿彌陀佛をまつり、眞言宗は大日様をまつり、日蓮宗は題目をまつり、禪宗はお釋迦をまつると云ふやうに、その據りどころとする佛様を「本尊」として正面におまつりして居るのです。とは云へその寺の歴史緣由に依つて、或は觀音様を本尊とし、或は不動様を本尊として居るものもあります。嵯峨の清凉寺は淨土宗でもお釋迦様、下總の成田山は眞言宗でも不動様となつて居ります。

また基督教は新教に於ては像をまつらないのが規定ですから、かうした具體的な相違を見ることは出来ませんが、舊教ではよく正面にマリヤの像がまつられ、片すみに十字架にかゝつたクリストの像がまつられて居ります。

感じを見せてゐないところに、三氏の臨誨と苦心の程が偲ばれる。第一編歴史では、釋教の生涯から始まつて、現代までに及ぶ樹大な内容を持ちながら、よく記事の

雨瀾り豪華版

山崎善一

「水道が助かるから屋根はなほさないでおきませうね」



取舍選擇を行つた結果、簡潔にして然も歴史として一貫したものを持たせてゐる。中でも法然上人については可成り詳細で、傳統形祖まで説き及んでゐる點は、平凡な

布教の書物と違つた眞誠な態度が見える。けだし法然上人を深く研究すれば、そこに宗祖をかくあらしめた因縁と、その後發展してゆく種子が明かにされ、佛教全史の自ら包含せらるるを見る。

第二編教義では、繁蕪を避けて極力その簡潔化に努力した跡が歴然とわかる氣がする。勿論この簡明さは偏に法然一師に依るの態度を徹底させた爲であら

うが、それより従前に詳細な宗義を記述することを止め、その代りに淨土宗としての眞髓を手早く強調することに努力した爲である。隨ち著者は現代人が宗義そのものに持つ疑問なり、不信仰的態度のあることに觸み、餘程この方面に注意を拂つてゐる。信仰の點點としての阿彌陀佛に、限りなきいのちと光りとを強く述べてゐる如き、又信仰の獲得なる一章を設けた如き、所謂現代的な宗教學的な香りを濃はせてゐるのに氣がつく。更に「信仰の生活」念佛と日本精神の章に於て念佛信仰より家庭を、社會を、そして國民信念を培ふべきを説いてゐる如く、從來の宗義とは云へぬ内容を持つてゐるのも、著者がこの一書を以て從來の佛教書から一步進んで、一躍よく社會的活動に裨益するとこ

ろあらんとし、生きた信仰心を培ふの讀本たらしめんとする意圖が窺はれる。

第三編實踐では、飽まで現代人の信仰を求める求道心に直接觸れようと努めてゐる。次いで説二編とは全然方向を變へて、現實的に具體的に寺院の持つ意味や、誰が讀んでも興味を覺える佛教的年中行事を解説する。更に我々の常に身邊にあるもの、例へば佛壇、本尊、位牌、供へ物、誦經具類等のものに親切な説明をしてゐる。恐らく一般讀者の中には、具體的であるだけに實踐篇に多くの興味をひかれるものがあらう。

兎に角本書は淨土宗の標準讀本として完全なものであり、勿論教科書にも適し、淨土宗のみならず各宗の寺院信徒としても一本をその座右に置いて然べきであらう。



さまよふ私達の現實

— 般若心經講義(第六講) —

中 村 辨 康

(九) 空中に相なし

是故空中、無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無
色聲香味觸法、無眼界乃至無意識界

この故に空の中には色もなく、受も想も行も識もなく
眼も耳も鼻も舌も身も意もなく、色も聲も香も味も觸
も法もなく、眼界もなく、乃至意識界もなし。

森羅万象の凡ての現象は、皆な相(すがた)を備へないも
のはありませんが、その相は因縁に依つて現はれたもので
因縁が變化すればすぐ他の異つた相に變化しますから、本
質的に一定不變の相を持つて居るとは云はれません。

是故にこの「心經」では私達が常に差別の相に捉はれて
居るのは事物を固定的に見て居るから、五蘊も十二處も十
八界も皆な悉く時處位に依て變化して居るから、本質は畢
竟空なる状態であり、唯だ因縁の然らしめた一時的現象と
しての「流動の相」を示して居るのに過ぎないと云ふこと
を説明すべく、こゝに

- 一、五蘊空
 - 二、十二處空
 - 三、十八界空
- を取り出したのであります。

(イ) 空の中には五蘊の差別相なし

是故空中、無色無受想行識

五蘊とは身と心のことであり、その身と心とは私達に常に「我」を構成せしめて居るけれども、實質的には「空なる状態」のものであつて「我」を立つべきものでないことは、既に述べた通りで、再び説明を要さないと思ひますが前の「五蘊皆空」は現象の差別相を内面的に觀察して「五蘊即ち物心の二つは畢竟「空なるすがた」

であることを云つたのに反して、今度のは眞理であるところの「空」なるものは平等のもので、その平等の理の上から云ふならば色もなく受もなく想もなく行もなく識もなく随つて一切の萬象は實在的な不變なものでなく、また「我身」とか「我がもの」とかと執着すべきものでないことを達観すべしと勧めて居るのです。

(口) 空中には十二處なし

無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法

十二處と云ふのは私達の五官と意識と及びその對象となる色境、聲境、香境、味境、觸境、法境の六境を指したもので、それは何れも一つの世界であり場所であり六識の生

ずる處であるから、十二の處と云ふ字を使つたのです。それはまた内と外との二つに區分されます。

十二處 (六内處(眼耳鼻舌身意) 六根 (六外處(色聲香味觸法) 六境(六塵とも云ふ))

そしてまた一には「入」と云ふ言葉をも用ひて居ます。つまり六根と六境とは互に渉入して六の識が生ずるからです。然しかうした區分や差別は唯だ外面の一時的現象についてのものに過ぎません。随つて正しい生活はさう云ふものに捉はられない眞正なる中道を歩むやうにあると教へるのです。

釋尊が三十五歳の十二月七日の夜に、十二因縁を順觀し逆觀して其の黎明に謂ゆる「一切知」を得て、一聲「南無佛」と合掌し稱名したと傳へられますが、その時論つた詩に「家の建造者を求めつつ、それを見出し得ず、流轉して幾度となく苦しき生を受けた。

家の建造者よ。汝は見出された。再び家は造らないであらう。梁や棟木は碎かれ、心は滅盡の境に入り愛欲を斷滅した。」

とありますが、家の建造者は六根と六境との和合の結果に名付けたものに過ぎないから、その家の建造者たる「汝」

は要するに夢想であり執見でしかあり得ない。換言すれば「我」と云ふ家は十二處の寄り集りであつたことが發見されたので、今はその「我」に捉はれず、事物の眞相を把握し生活の上には苦樂を離れ、理論の上には有無の謬見を離れて、一切を正しく理解し、正しく生活すべきであると確信せられたのでした。

元來印度に於ける先住民族は、智識的に極めて低級でありましたから、智識に勝れて居たアールヤ人に征服されてしまつて、奴隸階級に追ひ落されて居たのでした。それでその階級は

一、社會生活上の權利と自由とがなく

二、奴隸としてこき使はれ

三、アールヤの神を信することや、その靈場に詣ることさへ許されず

四、遊んで居たいのは山々であるけれども、それでは衣食が得られないので、止むを得ず支配者の下でいやいやながら働く

と云つた状態であり、支配者のアールヤ人は宗教と政治と武力と産業とを分擔獨占して、働らかずに贅澤三昧の生活をして居たのです。この故に印度に於ける住民の生活態度

はおのづから二つに分れざるを得ませんでした。

一、樂行

知足 有閑上流者
乞食

不知足 不平不満者

二、苦行

可意 將來の樂を望んで苦行を喜ぶもの
不可意 いやしく働くもの

かう云つた實狀ですから、思想的にも非常に對立的でありまして、唯心主義と唯物主義と對立し、斷見(凡てを否定せんとするもの)と常見(凡てを是認し事物の存在に固執するもの)と對立し、修行をするにも苦行派と樂行派と對立すると云ふやうに、一方面的な邊見に捉はれて居たのでした。

だから釋尊としては何うしてもかうした謬見を打破すべく中正の道を指示しなければならなかつたのです。

然し之れは必ずしも釋尊時代ばかりでなく、また印度と云ふ一區域に限られるばかりでなく、人間のあるところ何處でも何時でも正しい考へは少く、偏つた考への多いのは當然であります。大抵は物質主義であり快樂主義であり、また常見即ちものは何時までも存在し得ると云ふ考へからあてにしてはならないものを何處までもあてにして居るの

です。その粹死んでしまへば何もなくなると云ふやうな斷見にも捉はれて、勝手氣儘のことをして居るものも澤山あるわけです。

ですから何うしても前の「五蘊皆空」に依つて「我見」を破り、次ぎにこの「十二處空」を以て「邊見」に墮ち入らうとするものを破らねばならないのです。

(ハ) 空中には十八界もなし

無眼界乃至無意識界

五官等の「根」に色聲香味等の「境」が刺激を與へますと、私達はいろ／＼な「識」を呼び起して事物を見たり聞いたり味はつたり致します。それは「六根」と「六境」との和合に依つて起つた認識の世界ですから、一應六個の識界しかないやうですが、境を離れても眼は眼の世界を持ち耳は耳の世界を持つて居るので、六根は其まゝそれ／＼六つの独自の世界と云はねばなりません。境もまた「根」を離れて獨自に色の世界、聲の世界、香の世界、味の世界、觸覺の世界、及びそれを總括した抽象の世界が存在し得るから、それらの一群を根界、境界、識界として合計十八界ありとしたのです。

元來「界」と云ふのは「駄都」と云ふ梵語で、それには「因」の義と「種族」の義との二義があると云はれて居ます。

つまり「根」と稱する六官と「境」と名付くるその對象と、それらの和合に依つて起る「認識」との三は、互ひに原因となるものだからであり、またそれは畢竟同一な種類同一な種族であると云ふ意味です。またそれを「界」と見るのは各々獨立した性質と作用を持つて居るからであります。

六根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根）

六境（色境、聲境、香境、味境、觸境、法境）

六識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識）

は夫々異つた境界區域を持つとして十八界としますが、委しくは

十八界（眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、意界、色界、聲界、香界、味界、觸界、法界、眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界）

とならべ云ふべきを、この心經では最初の眼界と最後の意識界とを擧げて、中の十六界を「乃至」の言葉で略して居るのです。そして之れ等もまたすべて固定して居るのでないことを云はふとして居るのです。要するに主觀客

觀を細かく別けてこの主觀も客觀も凡ては因縁に依つて生じたのであつて、花は紅、柳は緑のそのまゝに一切を素直に見て居ればよいのに、兎もすれば其處に好き嫌ひの觀念を起し、色々な煩惱妄念を起して自ら心をなやまし苦しめて居る私達凡夫の有様を悲しまれ、それらに捉はれてはならぬことを勸めて居るものであります。

またこゝに「無」と云ふ字を澤山ならべて居るのは「有」に對する相對的の「無」でなく、相對的な「差別感」を起してはならぬことを言はふとするもので、一切を「有るがまゝ」に見て、好悪善惡多少等の區別をつけず、皆な同一な價值と見なければいけないのであり、それはまた私達に煩惱を起さしむる原因となるもので、却つて人生そのものを複雑にし、逆に苦勞を増さしむるものであるからであります。

むかし、印度の尸羅波と云ふ所に「演若達多」と云ふ女が居ました。遊女でありましたから謂はゞ「顔」がもとで、毎朝起きると鏡に向つて念入りに化粧をするのが日課になつて居ました。

或朝、例に依つておめかしをしようとしたが、何うしたわけか、自分の顔が鏡に寫らないのです。多分鏡に布

か何か掛かつて居たのを寢ぼけ眼で見た爲でせう。それですつかりあはてゝしまひました。無論少し足りない婦人だつたに相違ありません。その女はびつくり仰天して「さあ、大變だ。私の頭が無くなつてしまつた。昨夜寢て居るうちに誰か盗んで行つたに違ひない。さう云へば夜中にミシミシガタガタ音がしたやうであつたが、あの時泥棒が入つたのであらう。氣をつけて眼をさませばよかつた。何うも飛んでもないことをしてしまつた。さあ大變だ。顔があつての職業なのに、顔がなくなつてしまつたらしようばい上つたりで今日から食べるにも食べられはしない。然しぐず／＼しては居られない。何うしても取り戻さねばならない」と殆んど半狂亂のやうになつて外に飛び出し町中をわめき歩いて

「私の頭を盗んだ者は誰だ。早く返して呉れ。私の頭を返して呉れ。直ぐ返して呉れ。返せえ。返せえ。返せえ！」

町の人達はびつくりして大勢で

「やあ、演若達多が氣が狂つた一

とはやし立てるので、女はます／＼癪癪を起し夢中になつ

て騒ぎ廻り馳け廻り全く手がつけられない有様でした。
その時或人が行きなりうしろから拳骨で、演若達多の頭
をボカンとなぐりつけました。

演若達多は思はず

「痛い！ 痛い！」

と頭をかゝえましたが、フツと氣がついて

「あつ、あつた。あつた。頭があつた」

と嬉しなさに泣いたといひます。

馬鹿氣た話ですが、實際にあつた事ださうです。印度人

の教養の足りなさを物語る一事例として面白い話ではあり

ます。

然しこの話をジツと考へて見ますと、馬鹿話として一

笑に付し去ることは出来ません。私達日常の生活が一から

十までかうした姿ではないかと反省させられるからです。

私達は日常生活の中の十八の夫々の境界に於て、一切の事

物がそれ自體に好き嫌ひなどの貧着を起すべき「性」を持

つて居る筈はないのに、私達は常に「愛欲」に依つて之れ

を得ようとし、或は之れを失ふまいとして居りますが、自

分の思ひ通りに行かないと或は「瞋」を起し、或は「愚痴」

を起して、色々な妄見をそれからそれへと派生せしめて、

却つて自ら苦を求めて居ることは、恰度この演若達多が鏡
の中に自分の大事な顔が寫つたか寫らなかつたかの「影」に
捉はれて、泣いたり怒つたり笑つたり苦しんだりして居る
のと同じではありませんまいか。

一切の現象は「流動相」です。流動の緩慢のものを固定

的な存在と思ひ易いことは無理ありませんが、動くもの

變化し行くことをあらはに示して居るものまでをも固定的

なものとして取扱つて居るところに私達の根本的な矛盾

があり誤謬があると思ひます。

別けても最も大きな誤りは私達の「壽命」に就いての

考へ方です。

こんな話があります。

良寛和尚の處へ或日八十歳になる老人が訪ねて來て

「私は本年八十歳になりますので、親戚や子供達が寄り

集まつて祝をして呉れましたが、さて考へて見ますと、

何だか人間の壽命の頂上に來たやうな氣がして心細くて

いけません。私としてはまだ色々仕残した仕事もあり

り心残りが致しますので、もう少し長生きがしたうござ

います。就きましては和尚様は大變お徳の高い方と承

りましたので、長命の御祈禱をして頂きたいと存じまし

と突然參上致しました次第で御座います」

と頻りに頼みました。良寛さまは

「はあ、左様ですか。然し御老人、長命と申しても色々あるわけですが、一體貴君は何歳位まで生きられたいのですか」

「へい。別に何歳までとは考へませんでしたが、せめてもう十年、九十位までは生きて居たう御座います」

「九十歳でよろしいのですね。ではさう云ふことに決めて御祈禱して上げませう」

「イヤお待ち下さいまし。いつそ勘定のよいやうに百までにして下さいませまいか」

「おやすい御用です。然しよく考へなさいましよ。百までと決めると百一歳になると同時にお待ちが来る事になります、それでもう心残りはありませんか……」

「さう云はれますと、一寸御返事に困りますが、それでは何んだか厚顔しくしてお恥かしうございますけれど、もつと願はれますでせうか……」

「御老人、あなたは太變遠慮して居られるやうですが、ひと思ひに腹藏なく云ふて見なさるがよい」「へい。ではもつと御願ひが出来ませうか」

「さあ／＼遠慮なく云ふて見なされ」

「有り難う御座います。出来ますことならばひと思ひに百五十歳位のところまで御願ひ致したう存じます」

「さて／＼貴老は慾の少い方ですな。では百五十歳でよいですね」

「イヤ／＼慾を申せば切りもありませんので、まあ／＼その位なら結構かと存じます」

「まあ／＼その位とは、まだ足りないと思えますね。然し、百五十歳でよろしうございますね。あとでもう少しと云つても駄目ですよ」

「ちよつと／＼おまち下さいまし。では如何でせう。二百ぐらゐでは……」

老人は良寛和尚に度々念を押されて段々せり上げ、遂に三百歳までの御祈禱を御願ひすることになったのでした。

すると良寛和尚は

「貴老はよく／＼慾の少い方と見えますね。鶴は千年龜は萬年と云ひますやうに、鳥や獸でさへ貴老の望みの何倍何十倍の壽命を保つて居るのです。ところが人間は萬物の靈長ちやと申しますのに、さて／＼鳥獸にもおとつた望みしか持てないとは餘りにもお情けないやうに

思ひます。さう少しづゝせり上げないで一思ひにいつそ死なない御祈禱をすることにしては何うでせう」

「えつ。死なない御祈禱ですか。そんなことが出来ませうか」

「無論出来ません。お釋迦様一代の御説法は皆な死なない御祈禱ばかりですよ。ようおききなされ。……」

と、それから色々佛教の話をしてされたと云ふことですが、生命と云ふものは決して長短とか年限とか云ふやうな量の問題ではないのです。然るに私達はこの五蘊の存続を存在と見て、唯だ命の長からんことをのみ念願して居る實狀です。

然しさう云ふ觀念の下に生存して居たのでは、たとへ千年萬年の長壽を得たところで、一瞬の命でしかありません。それは畢竟「命」の形骸です。昨日と死に今日と死んで行く「死」の存続に過ぎません。

此故に私達は何うしても如來の無量壽の中にこの一念一念を打ち込んで行かねばなりません。一念の中に「無量壽」の價值を見出しつゝ與へられたる生命を活し用ゆることに専心したいものです。

此の信仰、此の信念の生活には、やれ五蘊だのやれ十二

處だの、やれ十八界だのと云ふやうな煩雜な考へは要りません。唯だ生活の中に「無量光」の輝きを仰ぐばかりです。

だから如來の「無量壽」を願ひ求めて止まない淨土の信仰のみが、本當に「空に徹するもの」です。

寔に迷ひさまよい行く私達の現實を救ふものは唯だ阿彌陀佛への信仰だけだと確信します。

「空とは何ぞや」の問題の如きはその信の中にのみ味ひ得られることではありませんまいか。

(五三頁より續く) 隨つて基督教だけが教主を第一にまつて居るとも云へません。たゞクリストは教主であると共に救主であるとする建前からクリスト中心になつては居ます。また佛教では三身即一を説きますから、法身の大日の中に報身阿彌陀、應身釋迦がこもり、報身の阿彌陀の中に法身毘盧舍那、應身釋迦牟尼がこもり、應身釋迦の中に法身報身がこもつて居るわけで、其の寺の緣由歴史で如何なる佛をまつらうとも理論的には差支へないのです。然しそれでは理由を持つて廻つて説明しなければなりませんから、信仰に直接した佛様を「本尊」とした方がいいわけです。別段、意があつてお釋迦様を片隅に置いて居るわけではありません。

編輯後記

◇中支の我が軍は素晴らしい戦果を擧げて、敵をいよく困窮の中に追ひ込みました。炎熱の野に勇戦して下さる將兵に心から感謝を捧げます。

◇雨が不足で東京では給水の時間制を實施しました。われわれの困苦缺乏に耐えることの必要さは今後とも増すでせうが、戦地の苦勞を憶へば何んでもありません。

◇それにしても氣づかぬ内に如何に大きな季節の恩を蒙つてゐたかを、今更ながら重大問題の一つとして痛感します。

◇吉田綾二郎先生の御病氣はもうすっかり快癒せられましたが一時は大部熱が高かつた御様子でした。病後のお疲れのとれぬ内に「初夏静念」をいただきました。

◇佐藤春夫先生には久しぶりに玉稿をいただきました。先生の母堂がお亡くなりになつて早くも一年経ちました。先生は御母堂に捧げる氣持で執筆下さつたやうに聞いてゐます。それに本月は序に過ぎませんが、今後久しく連載して下さることゝなつてゐます。

◇井上哲次郎博士は有名な學者であり、老後ますます「お丈夫な」で知られてゐます。博士の健康法は實際毎日勵行されてゐる方法ばかりです。

◇野生司畫伯は讀者も御承知の通り印度ムラダンダー寺の大壁畫を完成せられた方で、「阿沙茶月の光」は當時のことが現寫として浮ぶやうに思はれます。又澤山な畫で誌上を飾らせていただきました。

◇石橋徳作氏は「百萬地蔵」の發願者として有名であり、四人の「純情」は同氏が全國の刑務所を講

演巡禮した際の、一、二の話です。服役者から同氏のもとに寄せた文を見ると、涙の出るやうな事柄が幾つもあります。

◇高瀬承嚴氏の「地獄に墮ちた紫式部」は同氏得意のものであります。増谷文雄氏の「宗教的なもの」は都合により一回休載いたしました。

◇會員通信は又しても多くを割愛せねばならなくなり、幾重にもお詫言ひします。

◇御註文の場合は種類、部数、代價を楷書で明瞭に御書き下さいませう。尙送料をお忘れなき様お願ひします。

◇勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ます。

◇その他の問合せは往復はがきか又は返信料同封で御願ひします。

◇會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

淨土 七月號

昭和十年七月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年六月三日印刷納本
昭和十年七月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町ノ二
印刷所 六日市印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷中)

菊牛載一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート製、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水

譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢
(品切)

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢
(品切)

中里介山著

(三六版二五〇頁タロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・柳芳隨圖著

(增刷中)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

淨土宗管長

郁芳隨圓猊下序

大野 法道
中村 辨康
前田 聽瑞

共著

菊版四五〇頁・總クロース装

本文五號バラルビ

挿繪寫眞入

定價 二圓五十錢

送料 二十二錢

淨土宗讀本

淨土宗の教義は？ その實際は？ その歴史は？ その現狀は？ つまりいま淨土宗が持つ凡てのものを、萬人に解るやうに、立派な體系のもとに説いたのがこの讀本です。しかも執筆者は現淨土宗の第一流理論家と信仰家で、永く後世に残る定本とするために何回も何回も協議を重ねて、苦心練磨の結果出来上つたものです。校正も印刷も製本も慎重を期してやりました。ですから、信頼して讀める上に、淨土教義に就ての正しく廣い智識が得られ、書架に飾つて恥しからぬ書物です。正しい教義・信仰を求められる人、淨土教に就いて知り度い人々は勿論、宗教とは何かと迷はれてゐる人、時局下僧俗等に自己の信仰を確固たる體系の上にすへるために讀んで頂き度い讀本です。

一家に一本！
明るい家庭！

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

第一編 歴史

第一章 釋尊の生涯

第二章 佛教の發達

第三章 法然上人傳

第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

第一章 淨土の教義

第二章 信仰の對象

第三章 西方の淨土

第四章 信仰の獲得

第五章 念佛の意義

第六章 信仰の生活

第三編 實踐

第一章 生活義としての念佛

第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院

第三章 寺院の構成及び機能

第四章 信仰修養に必要な諸準備

第五章 信仰修養法としての行儀

第六章 人生の最大儀禮

第七章 祖先への報恩行

第八章 信仰増進の方法

淨土 第六卷 第七號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年六月廿日印刷納本 昭和十五年七月一日發行

定價 金十二錢（送料）
滿鮮露等 金十三錢
外地定價 金十三錢（五厘）